

Dr. ユーバーシャルの日本学と教育・研究の軌跡

——平生日記その他——

出口 晶子

目次

序. おお、ユーバー先生！

1. 来日—大阪高等医学校時代
2. 第一次世界大戦—ドイツ兵志願と俘虜生活
3. 日独交流とドイツ語教育—大阪医科大学復帰
4. 台湾原住民・ボガリ社への旅
5. ライプツィヒ大学へ
6. 甲南学園での教育

序. おお、ユーバー先生！

ハンス・ユーバーシャル/Hans (Johannes) Ueberschaar (Überschaar) 博士は、ライプツィヒ大学で歴史学者・カール・ランプレヒト (Lamprecht) の教えをうけた日本学者であり、長年甲南学園でドイツ語教育を授けた人物である。2020年で没後55年になる。1924年9月の旧制甲南高校のドイツ語非常勤講師に始まり、ライプツィヒ大学に在職した5年程の期間を除けば、戦後の新制高校、甲南大学教授を含め学園での在職は34,5年になる。直接聲咳に接した教え子たちはほぼ70代後半以上になった。ユーバーシャルへの関心はゼミ生とのふとした語らいを契機とするが、それが自らの記憶の旅路や平生夙三郎研究、船の文化史研究に因らずもつながることになる。煩雑になるが、経緯を少し説明しておく。

第一次世界大戦時、ユーバーシャルは東京浅草と千葉県習志野の俘虜収容所にいた。その時の所長は西郷隆盛の嫡子、西郷寅太郎であった。寅太郎は筆者の3代前の親戚の一人である。母方の先祖は西郷隆盛の弟・西郷吉二郎であり、吉二郎は1868年の戊辰戦役に従軍し、新潟県三条の五十嵐川での銃撃戦で「戦死」した。享年36歳、その子みつ(曾祖母)は5歳であり、みつの実母はすでに3歳の時に亡くなっていた。五十嵐川の激戦地に建てられた戊辰戦役碑をサケ漁の民俗調査中に偶然見つけた時、初めて祖先の記憶を自分の目で確かめようと、五十嵐川から官軍本営地のあった

柏崎の海港、合葬墓のある越後高田の金谷山を訪ねたことがある¹⁾。幕末から明治初めの歴史舞台に登場し、繰り返し生産されてきた西郷隆盛の人物伝や出来事の検証にたいし、子孫の直接の記憶とは実に乏しいものである。しかし従兄同士のつきあいが当時は密だったとみられ、寅太郎がドイツの陸軍学校に留学する際、みつの弟・隆準^{たかのり}も同行し1885年ドイツに渡ったという²⁾。寅太郎19歳、隆準21歳の頃だった。1887年(明治20)12月10日森鷗外の独逸日記には、寅太郎について「始て西郷の子を見る」とある³⁾。鷗外はその1週間前に、後に日本学者となるカール・アドルフ・フロレンツと出会っていた。「三日。夜巽軒と会す。巽軒独逸の詩人フロオレンツ Florenz を伴ひ来る。フロオレンツ名はカル、アドルフ Karl Adorf. 猶少年なり。余に詩稿を示す⁴⁾。巽軒とは井上哲次郎のことで、ドイツ留学ののち東京帝国大学初の日本人哲学教授となった人物である。当時31歳の巽軒に伴われ、25歳だった鷗外の目にまだ「少年」と映った22歳のフロレンツは、ライプツィヒ大学を卒業後24歳で日本政府の招請により来日した。フロレンツの日本学は、ユーバーシャルに少なからず影響を与えることとなった。

収容所で寅太郎とユーバーシャルがどんな会話をかわしたかはわからない。だが、ユーバーシャルにとってその出会いが西郷隆盛の存在とその最期を日本学に結びつけて考察する遠因になったと筆者は推察している。後述する台湾原住民「ボガリ (Bongali)」の論考には「西郷隆盛の首」が登場し、日本と南方アジ

アにまたがる齧首の風俗に文化的インスピレーションを与えているからだ。

2019年1月、東海甲南会の年次同窓会で、筆者は岐阜で生まれ育った甲南学園創設者である平生鈞三郎に関連し「常二備へヨ」の精神的風土」と題する講演の機会をえた。講演の終盤、学生とのエピソードの一つとしてユーバーシャルの名前にふれた時、会場から「おお、ユーバー先生！」という声があがった。「ユーバー先生」とは、ユーバーシャルという長い名前を縮めて学生たちが呼び慣わした愛称である。この種の縮め言葉は、学生が得意とする習慣だが、先生は「ユーバーじゃない、Ueberschaar!」と折々発音を修正したという（ゆえに見出しの「ユ」は「ユ」と、ウムラウトがついている）。教え子の中には何十年も前に教わったフレーズをそらんじる者もいた。懐かしくも記憶に残る教育と深い印象を残していることを知り、ユーバーシャルの日本での足跡を民俗学的手法で訪ね、記憶を再構築しようと考えようになった。注目したのは、2つの世界大戦を含め、共に同時代を生きた甲南学園の創設者・平生鈞三郎との接点である。18巻に及ぶ平生日記はまだ読了に達しておらず、直接ユーバーシャルにふれる部分を発見していないが、両者の人脈や経験には数多くの接点や共通点があることがわかってきた。

他方、習志野市では、近年俘虜収容所関連資料を文化財に指定する動きが進められてきた。それには日記やボトルシップなどのほか、生前ユーバーシャルが所蔵していた写真126点（以下旧蔵写真）が含まれている。筆者は2020年1月、俘虜収容所閉鎖100年の記念行事として講演会が開催された折、市役所のフロアで氏の所蔵写真30点余りを間近に見た。担当者に伺うと、2000年1月、習志野で開催された特別史料展「ドイツ兵士の見たNARASHINO」に来られた、ユーバーシャルの教え子だった甲南大学名誉教授の黒崎勇先生が持参された資料で、長い間預かり状態だったものを、2018年習志野市に正式な寄託手続きがなされ、他の資料群と合わせ指定にこぎつけたという。このたび習志野市教育委員会の許可をえて旧蔵写真全体に目を通すことができた。

第一次世界大戦時、日本各地にできた俘虜収容所をめぐる日独喫等の交流史研究は、徳島の板東や姫路、久留米、習志野などで進められ、互いの連携を築きながら分厚い研究蓄積がある⁵⁾。そこにユーバーシャルは欠くことのできない人物としてたびたび登場する。他方1930年代の日独関係史の中でもドイツのヴォルム

(Worm) やビーバー (Bieber), アメリカのロー (Law) などがユーバーシャルに言及している⁶⁾。それでもなお、氏の教育研究の軌跡については、明らかにされていない部分がある。ここでは平生日記、同時代の新聞記事、教え子からの聞き取り等を通して、主にユーバーシャルの日本での教育研究の軌跡をとりあげる。なお、Ueberschaar のカタカナ表記は、「ユーベルシャル、ユーベルシャー、ユーバーシャ、ユーバーシャール、ユーバーシャル、ユーバーシャル、ユーバシャル、ユーテブシャル、イーバーシャル、イユーベルシャル、ウバシャ」と様々にある。これらは聞いたままか、原音を意識したための表記違いであろうが、本論ではより広く使われているユーバーシャルを用い、引用は原文通りとした。

1. 来日一大阪高等医学校時代

ユーバーシャルは（写真1）、1885年3月4日ドイツ・ザクセン州マイセンに生まれた⁷⁾。ルーテル福



写真1 Dr. ユーバーシャルの肖像写真 (No.98) 1932~1937年にかけてのライプツィヒ大学在職中、ドイツの写真館で撮影した47~50歳頃のものと思われる。

(No.) があるものは習志野市教育委員会所管のヨハンネス・ユーバーシャル博士旧蔵写真、説明は筆者付記（以下同様）

音派の家庭に育ち⁸⁾、本籍はヴェストファーレンの鉦工業都市ボーフム (Bochum/Westfalen) とされる⁹⁾。習志野市所管の旧蔵写真には、ボーフムで撮影された若い娘の肖像写真 (資料番号 No. 113) が含まれる。その女性が年齢を重ねたのちの写真もあることから、おそらく妹ではないかと推測する。ボーフムに生活拠点があったことは旧蔵写真からも間接的に伺える。

生誕地のマイセンは、近世期九州佐賀の伊万里焼に強く影響をうけた陶器の産地である。鹿児島島の薩摩焼と同様、佐賀の有田では16世紀末、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって連れてこられた陶工たちが日本の地で窯業を定着させ、幕藩体制下の殖産を支えていた。伊万里焼が1670年代西洋へ届くと、ザクセンのアウグスト強王は、精力的にこの焼物を収集し、技法を奨励し、マイセンは東西文化をつなぐ窯業地として発展したことで知られる。ザクセン王国の流れを汲んだ最後の王様フリードリヒ・アウグストは、20世紀初頭のクリスマスの頃、ひとりきりで夕景色にきらめくプラゲ通りを散歩し、きらきら光る窓飾りの前に、物思いに沈みたたずんでいた。「もちろんそのころはまだ、じぶんが最後の王となろうとは、彼は知るよしもなかった」と、ケストナーは『わたしが子どもだったころ』にそう登場させている¹⁰⁾。

「今の日本は1人の天皇、一つの国旗を持っているのではないか。しかし僕の祖国は東西に分裂して、事毎にいがみ合っている。慨嘆に耐えない」¹¹⁾。1953年春、新制甲南高校の第3回卒業式、「卒業おめでとう」という簡単な祝意のあとに、ユーバー先生の口からとびだしたこの言葉を、教え子の岩本哲は忘れられなかった。東西ドイツの時代、ザクセンは東側に属した。長い分断を憂いたのは、同時代を生き、同じザクセン出身だった2人の間に共通していたようである。

ユーバーシャルの教育・研究の軌跡は、2つの大戦を挟み、およそ3つの時期がある。①26歳で日本にドイツ語教師として来日し、大阪高等医学校 (のちに大阪医科大学) の教壇に立った青年時代、②第一次世界大戦への応召と俘虜生活をへて、日本での教育研究に復帰したあと、「ライプツィヒ大学教授」となり再び日本に戻った第二次世界大戦頃までの激動の時代、③第二次世界大戦後から没年までの新制高校・甲南大学教授としての時代である。本論では概ねこの流れに沿って人との出会いや行動を辿り、論じていこう。

佐多愛彦・北里闌との出会い

ユーバーシャルは、1906年から5年にわたり、ラ

イプツィヒ大学でランプレヒトの指導をうけ、アジアの言語と歴史を学んだ。ランプレヒトは、世紀転換期に「文化史」という新分野から歴史研究を進めた中世経済史学者である。人文地理学のラッツェル (F. Ratzel)、実験心理学のヴント (W. Wundt)、経済学のビューヒャー (K. Bücher)、物理化学のオストヴァルト (W. Ostwald) など幅広い学際研究を展開し、同大学に文化史・普遍史研究所を設立した¹²⁾。ユーバーシャルが博士論文を執筆していた1910～11年当時、ランプレヒトは同大学の総長も務めていた。

ユーバーシャルが、府立の大阪高等医学校にドイツ語・ラテン語の教師として来日赴任したのは、1911年 (明治44) 7月のことである¹³⁾。来日は、当時大阪高等医学校の教授で、新しい医科大学構想を温めていた医学者の佐多愛彦の強い働きで実現していた。ドイツでの留学経験をもつ佐多は、かねてより高等学校における外国語教授に不満足で、外国語を生み出した一国の文化的精神から語学を教える用意を欠き、その効果が不徹底であることから、ドイツ魂を扶植するにたる語学教育を選択したいと考え、「世界史学教室の主任にして史学及び教育哲学の最高峰たる」ランプレヒト教授に自ら手書を裁し、「独逸語教授に対する年来の信念を披瀝して」推薦を託したという¹⁴⁾。ライプツィヒ大学の教授カタログに基づく (注8参照)、ユーバーシャルの哲学博士号取得は1913年、論文名は「日本における天皇の憲法上の地位—憲法史の見取図」(Die staatsrechtliche Stellung des Kaisers in Japan-Staatsrechtlich -historische Skizze. *筆者下線) とある。ユーバーシャルは1911年学位請求論文を書き上げたのち来日し、教鞭をとるかたわら、1912年日本における天皇の地位に関する学位請求論文を公刊した (表1-①)。本文87頁に及ぶ本書の内表紙には、ライプツィヒ大学高哲学部の博士号取得のための学位論文と明記され、目次の左頁には、「ランプレヒトとコンラーディの審査により第II部で認定、ライプツィヒ、1911年8月4日」とある。コンラーディ (Conrady) はライプツィヒ大学の中国学者であった。また前書きには日本文献は基本的にヨーロッパ言語で書かれたものを用い、日本語文献の翻訳は、当時ランプレヒトのもとで学んでいた新見吉治らの助力をえたことが謝辞として述べられ、「1912年4月27日大阪 J. ユーバーシャル」と明記される。申請・審査から学位論文の刊行、学位取得までは1年余を要したようである。なおライプツィヒ大学教授カタログの論文名は、学位請求論文の本の題名に下線「憲法上の staatsrechtliche」

表1 Ueberschaar, Johannes (Hans) の研究業績

①	1912a	<i>Die Stellung des Kaisers in Japan: eine staatsrechtlich-historische Skizze</i> , – Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der hohen philosophischen Fakultät der Universität Leipzig, Bornna- Leipzig: Robert Noske.
②	1912b	„Preussisches und Japanisches Verfassungsrecht: ein kulturgeschichtlicher Beitrag zu dem Thema „Rezeptionen und Renaissancen“: Vortrag in der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, gehalten in Tokyo am 27. Dezember 1911“, <i>Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens</i> , 14(2), S.171-195.
③	1913a	„E. A. Heber, Japanische Industriearbeit, eine wirtschaftswissenschaftliche und kulturhistorische Studie“, <i>Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens</i> , 14(3), S. 273-283. (書評)
④	1913b	„Haushofer, M. K.: – DAI NIHON, Betrachtung über Gross-Japans Wehrkraft, Weltstellung und Zukunft“, <i>Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens</i> , 14(3), S. 285-298. (書評)
⑤	1923a	„Die gegenwärtige Lage der geistigen Beziehungen zwischen Deutschland und Japan“, <i>Ostasiatische Rundschau</i> , 4(3), S.29-31.
⑥	1923b	<i>Eigenart der Völker: Grundsätze</i> , Leipzig: T. Weicher.
⑦	1925a	『独逸学語入門』丸善 (ハンス, ユーベルシャール, 西原泉之助 共著)
⑧	1925b	<i>Die Eigenart der japanischen Staatskultur: eine Einführung in das Denken der Japaner</i> , Leipzig: T. Weicher.
⑨	1926	„Die japanische Staatskultur und ihr neues Verhältnis zur Union der sozialistischen Sowjet-Republiken“, <i>Zeitschrift für Geopolitik</i> , K. Vowinckel, 3(1), S. 17-32.
⑩	1927	„Die deutsche Sprache in Japan und die Tagung der Deutschlehrer, Am 9. Juli 1926 in Osaka unter den Auspizien des Deutsche-japanischen Vereins“, <i>Japanisch-deutsche Zeitschrift für Wissenschaft und Technik</i> , 5(1), S. 3.
⑪	1928/29	„Bongali: Bei der Malaien in den Bergen des südlichen Formosa“, <i>Japanisch-deutsche Zeitschrift=Nichi-doku-gakugei</i> , N. F.1(1), S. 2-13.
⑫	1930a	„Die Entwicklungstendenzen der japanischen Kultur und die Individualisation ihrer Menschen“, <i>Japanisch-deutsche Zeitschrift=Nichi-doku-gakugei</i> , N. F. 2(1), S. 1-11.
⑬	1930b	„Studentenbewegung in Japan“, <i>Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik</i> , 63(1), S. 64-92.
⑭	1930c	„Die Organisation der Forschung in Japan“, Brauer, L./Mendelssohn-Bartholdy, A./Meyer, A. (Hrsg.), <i>Forschungsinstitute: ihre Geschichte, Organisation und Ziele</i> , Bd. 2. P. Hamburg: Hartung, S. 711-729.
⑮	1935	<i>Bashō (1644-1694) und sein Tagebuch „Oku-no-Hosomichi“</i> , Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Band XXIX, Teil A, Tokyo.
⑯	1937a	„Die deutsch-japanischen Kulturbeziehungen der jüngsten Vergangenheit und Gegenwart“, <i>Mitteilungen der Akademie zur wissenschaftlichen Erforschung und zur Pflege des Deutschtums</i> , Deutsche Akademie, 12, S. 1-10.
⑰	1937b	„Die Eigenart der Japaner“, Institut für Leibesübungen der Universität Leipzig (Hrsg.) <i>Japan und die XII. Olympischen Spiele 1940, Eine Einführung in das Verständnis Japans</i> , Leipzig: Otto Harrassowitz, S. 1-16.
⑱	1950	„Der Deutsche Mediziner Fritz Härtel in Japan. (seine geistig-personale Haltung in der japanischen Umwelt)“, 大阪大学医学部第一外科教室編『ヘルテル先生追想録』, S. 99-122.
⑲	1958	„Araki Torasaburō und Arima Raikichi“, 『甲南大学文学会論集』7, S. 1-14.
⑳	1968	„Einführung in Bashō's Kunststil“, 『甲南大学文学会論集 (ユーパーシャール教授追悼論文集)』37, S. 1-23 (1935 Bashō und sein Tagebuch „Oku-no Hosomichi“ の本論再録).

が加筆された形となっている。

来日5カ月後の1911年12月、ユーパーシャールは東京のドイツ東洋文化研究協会で講演し、それをもとにプロイセンと日本の憲法の「受容と再興」について論考を発表した(表1-②)。1913年にはヘーバー(Heber)著の『日本の産業労働, 経済および文化史研究』や地政学者・ハウスホーファー(Haushofer)著の『大日本』などドイツでの日本学関連の新刊本を書評し(表1-③④), 人文・社会にまたがる日本学の基盤を固めていた。

来日当時のユーパーシャールの年齢は26歳, 14歳年上の佐多とは以来「ほとんど親子同様の親交が続けら

れ」たといい, 佐多の伝記にはしばしばユーパーシャールのことが登場する¹⁵⁾。ところで, 大阪高等医学校には, ユーパーシャールと同じライプツィヒ大学に学び, 哲学博士の学位をもつ学習院教授の北里闌が着任していた。北里闌と佐多は, 従兄の細菌学者・北里柴三郎を介してドイツ留学時代に知己があり, 佐多の招きでユーパーシャール着任の1カ月前に予科に迎えられていた。北里闌は, 文学と劇詩研究のために私費で5年のドイツ留学をはたし, その間にドイツ語劇をドイツで出版するほど才能豊かな劇作家だったが, ライフワークは日本語・日本文字の起源に関わる研究であり, 日本古代文字解説の論文で学位を取得した逸

材であった¹⁶⁾。この北里闌もユーバーシャルの日本学に影響をあたえた一人である。大阪高等医学校は1919年大阪医科大学となり、佐多はその学長を務めた。1924年3月の大阪医科大学職員録によれば、予科長の北里は、「独逸語国語修身 ドクトルフキロソフキ」とある。外国人教師としてあがるのは、外科学のフリッツ・ヘルテル（Härtel）と予科講師のユーバーシャルだけである。ザクセン出身のヘルテルは1922年4月の着任で、ユーバーシャルの着任はそれより10年以上早かった。1924年当時のユーバーシャルは「独逸語心理学 ドクトルフキロソフキ」¹⁷⁾とある通りドイツ語に加え心理学も講義していた。

2. 第一次世界大戦

—ドイツ兵志願と俘虜生活

来日して丸3年を迎えた1914年夏、春学期の授業を終えたユーバーシャルは、夏期休暇を利用して九州地方に旅へ出る。そのさなか、第一次世界大戦が勃発した。彼はドイツの租借地だった中国・山東省の青島に赴き、志願兵として1914年8月ドイツ軍に応召した。この年の7月中には、49歳だった日本学者のフローレンツが東京帝国大学講師の任期を満了し、日本政府の叙勲をうけ、帰国の途に着いた〔読売新聞1914年6月29日〕。フローレンツはハンブルクの植民学院、後にハンブルク大学となった大学で長く勤めることになる。他方1914年は、ユーバーシャルの指導教授が来日する可能性があった。「史学会のオーソリーチーたる」ランプレヒトがアメリカからの帰国途次日本に立ち寄るべし、との噂があり、東京朝日新聞（1914年6月12日）にはランプレヒトの日本研究に関する井上哲次郎の談話が載っている。しかし戦局が影響したのであろう、来日は実現せず、彼は7月から11月にかけて北米を訪ね、そのままヨーロッパへ、そしてドイツに戻った¹⁸⁾。

軍隊でのユーバーシャルの任務と職位は、第3海兵大隊参謀本部通訳・予備陸軍中尉であった。彼は1914年10月12日の戦死者埋葬、負傷者救出のための一時休戦には、カイザー（Kayser）少佐の通訳を、青島陥落の11月7日、モルトケ兵営で行われた青島開城交渉ではワルデック（Waldeck）総督の通訳などにあたった¹⁹⁾。約3か月に及ぶ戦いの末、青島陥落で俘虜となった者は、外務省外交史料館の俘虜名簿に基づく4715名だったという²⁰⁾。俘虜たちは複数の御用船で日本に移送されることになった。ワルデック総督を乗

せた薩摩丸は11月17日門司港へ〔東京朝日新聞1914年11月19日〕、クーロ（Kuhlo、記事ではクーロー）中佐を含む俘虜943名を乗せた欧羅巴丸は11月18日広島宇品港へ、さらに19日午後には別の300名が入港上陸することになっていた〔東京朝日新聞1914年11月20日〕。俘虜として再び日本の地を踏んだユーバーシャルは「一行中に文学博士」という見出しで新聞に登場する（表2-①）。俘虜たちは、福岡・熊本・松山・徳島・姫路・大阪・名古屋・東京など計12か所の、寺や公会堂などに設営された収容所に分属され、クーロ中佐、ユーバーシャルらの一行は、宇品港から最も遠い東京の浅草本願寺となった。途中大阪駅でもユーバーシャルは取材に応じた。寺では、急遽居室や浴室が整えられた。

1914年11月23日の読売新聞では、「珍客が来た」という見出しでほぼ一面の取材記事が掲載される（表2-②）。クーロ中佐以下、313名（本文記事では312名²¹⁾、東京朝日新聞は311名）を乗せた汽車が品川に到着すると、浅草まで見物が充満した。記者もわざわざ国府津駅（現在の神奈川県小田原市、JR東日本とJR東海の境界駅）から汽車に乗込み、車中突撃取材という熱の入れ様である。駅周囲の屋根や小山は黒山の人だかりであり、日本語が堪能なユーバーシャルが取材に応じた。本願寺に到着した俘虜たちは、西郷所長からドイツ語で挨拶をうけた。クーロ中佐には同寺小書院の中央10畳の間を、副官及び通訳には隣室の10畳、離れの2階建てに中小尉13名、准士官以下は300畳の大書院があてがわれ、一同はその後茶菓の饗応を受け、豚肉のカツレツなどの夕食に移った。この記事には「Dr. Ueberschaar ドクトル ユーベルシヤール 日本ニイタ ドクトルウエーグマン」の手書き文字が載る。このカタカナ表記は、（表1-⑦）の著書表記と同じであり、当時はユーベルシヤールが自身が使用するカタカナ表記だったと思われる。一方のウエーグマン（*本文記事ではウエグマン）は、1914年東アジアの美術研究のため来日中、応召したO. C. Weegmann（以下ヴェークマン）である。本国政府の博物館調査委員として派遣され、戦争が始まる4カ月前より東京上野の博物館へ出向したり、徳川時代や藤原時代の文学、絵画、お寺の彫刻等を調査研究したりしていた〔東京朝日新聞1919年11月17日〕。移送の道中、日本の風物を取りわけ興味深げに観察するヴェークマンの姿が記者の目には止まっていた。

表2 新聞報道にみるユーバーシャル

①1914年11月20日 東京朝日新聞

「又参謀附通訳文学博士ユーテーブシヤール（*後にユーベルシヤールと登場 *印筆者註以下同様）は本年八月まで三年餘大阪高等医学校にて教鞭を執り居たるも暑中休暇の際九州地方を旅行中日独国交断絶せしより八月二日青島に向ひワ総督（*ワルデック総督）の通訳を為し居たる者にて大阪には知人多しと語り、彼等は一般に歐洲戦乱の状況如何にやと気遣ひ居るものゝ如く頻りに英字新聞を見度しと希望し逢ふ人毎に英字新聞を送り呉れよと依頼し尙十九日午後将校十三名下士卒三百名上陸下車して輸送せらるゝ筈なるが此俘虜は姫路に收容することゝなれり因みに残りは二十日二回に上陸せしめ東京名古屋の二箇所に收容する由なるも人員分配は未だ不明なり（広島特電）」

②1914年11月23日 読売新聞

「●珍客が来た 俘虜ク中佐以下三百十三名 品川より浅草迄見物充滿す

俘虜来！ 俘虜来！ 日独戦争お土産は昨日初めて日本の帝都に齎されたのだ、記者は遠来の珍客を国府津駅に迎へた、駅の周囲屋根と云はず、小山と云はず、黒山のやうな見物だ、記者はヒラリと一ツの列車に飛乗つた、車中に身の丈六尺有餘

△赫顔美髯の偉丈夫悠然葉巻を煙らせ乍ら微笑を以て俘虜見物を見下して居る、これぞ青島独軍の唯一の花と謳はれた、前天津駐屯司令官クロー中佐であつた、記者は徐に刺を示して「貴下の今日の境遇は同情に堪へぬ、日本国民は貴下等がなせる勇戦奮闘に対して甚大の敬意を払つて居る」と述べた處

△中佐は莞爾として「貴国の諺に敗軍の將は兵を語らずといふ事ありと聞いて居る、予は今貴下等の此の切なる同情に対して、答ふるに貴国の此の諺を以てするの止むを得ざる立場にあるのである。予は只貴下等を通じて予等が日本の此の親切を極めた待遇に衷心感謝の念を持つて居る事を貴国民に告げて貰ひ度いのである」と、更に記者の「日本軍に対する感想如何」の第二問に対しては「予は貴国将校の間に応ずるの

△自由を欠いて 居るのを遺憾とする」と述べ手を差延べて固く記者の手を握つた、列車は此の間二ノ宮を過ぎ大磯を通つて平塚に停つた、記者は中佐の室を辞して其の隣室なる俘虜委員室を襲うた、室へ飛び込むと受取委員長の塚本大尉「不可ん不可ん、此の通り室は狭し此処迄に幾度となく記者諸君に襲撃されて今は全く君等の襲撃は独軍の包圍よりも恐怖して居るのだ」と盛んに機関銃の連発をやる、漸う二駅丈と妥協成立してハツと室中を見廻せば

△珍客御参なれ 開戦前迄大阪府立高等医学校に教授を勤め戦争中はワルデック総督の通訳をしたユーベルシヤール君、及び曾て博物学研究の爲め神田猿樂町安田館に五ヶ月間滞在したドクトル、ウエーグマン君が蜜柑をムシャムシャぱくついて居る、茲に於いてか記者は監督将校の許可を得て天下晴れての快談を交へた、ユーベルシヤール君曰く「日本軍は確かに勇敢だ、然し歩兵の射撃は拙劣である、一番予等の驚いたのは日本軍から打出した加農砲の猛烈にして正確なるにあつた、飛行機は

△海軍の飛行機 は操縦振りと云ひ爆弾の投下と云ひ実に美事なものであつたが、陸軍の方のは餘り立派でなかつた、然し我軍から放つた銃丸の盛んに陸軍の方のに中つた處から見ると、或ひは陸軍の飛行機は極めて低空の處を飛行して最も大胆に振舞つたのかも知れぬ」と語つて居るうちに列車は大船に着いた、傍のウエーグマン君は頓狂に「富士山！ 富士山！」と叫んで車中の海軍少尉セーブツハー、カーラー陸軍中尉イーラーに「あれが日本で名高いフジサンだ、日本人は

△あの山を神 と心得て居るので面白いではないか」と説き聞かせる、見れば富士の霊峰は白い衣をつけてスツクと雲間に清い姿を見せて居る、列車は動き出した、今度はウエーグマン、ドクトルが口を切る「皆んなは（同室の将校）日本の風景の絶佳なものには感嘆して居るが、沿道の民家の汚穢なると、汽車の狭少なのに眉をひそめて居る」と、こんな呑気な話をし乍ら彼れ等は委員の塚本大尉や、吉岡一等軍医に倚り掛つたり、お茶をすゝめたり、非常に旧くからの友人にでも会つて居る様に敏談して居る、彼れ等は俘虜と云ふ気分よりも

△観光と云ふ気持 で居るらしい、斯くて駅と云ふ駅一杯になつた見物に或ひは手を挙げ、或ひは「ホラーホラー」を浴せ掛け恰も凱旋軍人の如うな態度で神奈川駅迄やつて来た、と筒袖半纏を着た穢ろしい四十男がツカツカと列車に近づいて、「貴様等が俺れの娘を殺したのだらう」と喰つて蒐り、一場の余興を見せる、沿道の群衆は理由もなく「万歳万歳」と叫ぶ、此の奇観壯観の間を午後四時三分と云ふに列車は無事品川駅に着いた。（後略）」

③1914年11月24日 東京朝日新聞

「又新聞雑誌及び書籍等はクロー中佐は到着と同時に閲覧の希望を申出で勿論差支無い事であるから目下参謀通訳たるユーベルシヤール博士が其選定の任に當つて居る」

④1915年6月26日 読売新聞

「将校連は兵隊に代数や英語などを教へ彼等自身の読書も盛んである、中にはアメリカ土人の生活などを研究してゐる先生もゐる、元京都（*大阪の誤り）高等医学校の教授だつたイーバーシャルと云ふ義勇兵は日本語がうまいので、皆んなに教へてゐるので誰も彼も簡単な

△日本文字を書く事ができるやうになつた、かと思ふと一生懸命写真術にこり固まる者などあり夜赤い電気の下で餘念もなく現像に熱中する、例のクロー中佐は運動に出ない事が多く、近來は多くの書物をタイプライターで書く事を練習してゐるが、時々ピアノなどを楽しむのである、例のイーバーシャルは学者丈に演劇通で此頃は俘虜連中のシバ井をやらうと云ふので此の先生が監督でシルレルの「ワルレン、スタイン」と云ふ

△劇を稽古中だ、此れはカトリシヤン戦争当時の事を芝居にしたものだから兵隊も出れば酒保の女も出る、そこで女役の巧な或る先生は白粉を買込むやらミシンで女の着物を縫ふやら準備に餘念がない」

⑤1919年11月17日 東京朝日新聞

古美術研究のウエグマン中尉が日本語で語る

「習志野に来て居る私共の仲間で私の様に残る者は大阪医大に雇はれたドクトル・ユーベルシャーとドクトル・ハック（国民経済の研究家）ルンプ中尉の四人位で其他商館の番頭や工場の技師として雇はれる者も幾人かある様だ・・・東京に宜しく・・・」

⑥1919年12月23日 東京日日新聞

「釈放の日を待ちこがれて 習志野大学教授と呼べる、経済学者エフ・エム・バック氏（右*ハックのこと）とユーベルシヤール博士（左）＝習志野収容所にて」 二人並んだ写真が載る

「昨日同収容所に独逸の経済学者エフ・エム・ダック（*ハックのこと）及ユーベルシヤール博士の両氏を訪ねた、両氏とも五ヶ年間俘虜の教育に努めて所謂習志野大学の教授であつた、ダック氏は語る「回想すれば、俘虜生活の五ヶ年も実に夢の様だやがて私は去るに臨んで貴紙を通じ貴国民から受けた無限の好意と親切に対して深く感謝の意を表する、私達は生活難の喧しい故郷へ帰つて生存競争の渦中に身を投ずることに非常に不安を抱て居るが帰国後は新独逸の建設に力を尽したいと思ふ」尚ユーベルシヤール氏は戦前大阪医科大学に教鞭をとつて居たのであるが再び医科大学に帰ると言ふ、因にワルデック総督は最後迄収容所に残り全員の帰国を見届け総督としての任務を果たした上帰国の途に就く筈である」

⑦1938年2月13日 東京朝日新聞

「親日映画」撮影に

「【大阪電話】世界文化の中樞は既に東亜に移つたと親日文化映画の製作を企て、二十三歳の若いドイツ青年元ウーファ社助監督パウル・チールス氏が去月三十一日飄然と来朝し、従兄に當る元帝大、阪大のドイツ語講師ヨハネス・ユーベルシヤール氏を訪ね、同氏の協力の下に映画「ヨーロッパさよなら」を日本文化のあらゆる角度から撮影中、歌舞伎や人形浄瑠璃をもとつて紹介に努めるはずであるといふ」

⑧1938年8月12日 大阪朝日新聞

若きドイツ映画人の印象 パウル・チールス

「十六ミリのカメラを携げて（中略）文化映画「ヨーロッパさよなら！」を撮りながら、今春三月阪急夙川に滞在中の元阪大、京大のドイツ語講師ユーベルシヤール氏をたよつて来朝したもので目下「刀剣」「茶室」など純日本の姿をレンズにをさめその映画の完成につとめてゐる（中略）私は日本研究家ユーベルシヤール教授、佐多博士、有馬博士によつてさまざまの日本芸術の鑑賞を教へられ、かつそれに愛着の念をもつていたつた。（後略）」

⑨1965年1月23日 朝日新聞 東京

「ハンス・ユーバーシャル氏（甲南大学文学部教授）二十一日午後八時四十分、老衰のため（中略）死去、七十九歳。二月十四日午後二時から甲南大学で学校葬が行われる。（中略）ドイツ人、明治四十四年大阪大学の前身である大阪府立医科大学講師として来日。（中略）身寄りはない」

収容所での講義

収容所でのユーバーシャルは、通訳に加え、俘虜が求める新聞や書籍等購入物の選定や調整（表2-③）、俘虜への日本語や日本に関する講義、『ワレンシュタイン』の演劇指導など所内の教育を主に担当した（表2-④）。1915年半ばには、東京本願寺から習志野に俘虜たちすべてが移ることが決まる。東京の収容所は制約も多く、不自由だったが、この頃にはソーセージ職人が腸詰ソーセージの加工に励んだり、村で評判の独唱の名手・ウエルダー（Wälder）が同僚4・50人の先生になり独唱を教えたり、「アメリカ土人の研究」をする先生もいて、銘々自分の特技を活かし、時間を有効に使おうと取組んでいた。ユーバーシャルが指導した演劇『ワレンシュタイン』は、三十年戦争期におけるボヘミアの軍人ワレンシュタインを扱ったシラーの劇作である。表3-⑱の日記に基づけば、上演にまでこぎつけたかどうか不明だが、日本語訳²²⁾が出るよりはるかに早くに、所内では熱心な練習が繰り返ら

れていた。1915年9月7日、東京浅草本願寺の俘虜318名中314名は、西郷中佐、原田・羽生中尉らに付き添われ、習志野へ移動した。残り4名は病で入院中だったという。道中、田園が広がる風景に俘虜たちは喜び、軍歌を合唱したり、「クーロー中佐は西郷中佐と並び始終何事か談笑」したりしている〔東京朝日新聞1915年9月8日〕。習志野には日露戦争時のロシア人俘虜収容所がすでにあった。その敷地を拡大し建設された施設には自由に動き回れる広さがあることをクーローは喜び、日記に綴っていた²³⁾。

ユーバーシャルの講義は、習志野の新生活でも継続された。とくに日本学に関する内容が豊富で（表3）、日独の国家や精神比較、婚姻、憲法、歴史、はたまた「日本人が目立った特徴、中でも脚がまがって内股であることについて」であった（表3-⑳）。

2月11日の講演日では、この日が古事記や日本書紀で最初の天皇とされる神武天皇の即位日、紀元節の祝日であることにふれた後、日本人とドイツ人の相違の

表3 俘虜の日記にみるユーバーシャル(講演その他)

灰色は講演者の名前は無いが、ユーバーシャルである可能性が高いもの

東京 浅草本願寺	
年月日	内容
①1914年12月4日	夜ユーバーシャル氏が日本に関する短い講義 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：6] 博士ユーバーシャル氏が夜「日本の国土と国民」という演題で興味深い講演をした 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
② 12月8日	夜は講演の続き、「日本の憲法について」資料：[エーリッヒ・カウル2001] ユーバーシャル博士がまた「日本について」の講義 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：6]
③ 12月11日	夜の講演は、「日本の宗教について」、神道という宗教の話だった 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
④ 12月15日	夜6時にまた講義、演題「日本におけるキリスト教と仏教」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑤ 12月26～27日	北京のオストヴェルト氏から手紙。ユーバーシャル博士によろしくとあり 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：8]
⑥ 12月29～31日	ユーバーシャル博士の「日本の婚姻」に関する講義 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カールハム 2003:8]
⑦1915年1月6～10日	ユーバーシャル博士が戻ってくるまで、将校のところで通訳。ユーバーシャルが講義をしている間、ヴェルダは熱心に合唱の練習をする。僕も「狼兵の別れ」を一緒に歌う 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：10]
⑧ 1月7・12日	夜には講演。演題「日本の教育」ほか 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑨ 1月19日	講演。演題「日本の産業と繊維工業」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑩ 1月23日	「日本の鉱業と精錬業」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑪ 1月26日	「家内工業について」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑫ 1月29日	「日本の家内工業」についての続き 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑬ 2月2日	「商業、陸軍、海軍に関する日本について」の講演終了 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑭ 5月14日～	夜、ユーバーシャル博士による新しい講演。演題「ドイツ国家学の概論と入門」ほか 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑮ 5月2～22日	ユーバーシャル博士の指揮で演劇部ができ、「ワレンシュタインの陣営」を稽古中だ。他の同志と一緒にヴェーデマイアの英語の授業に出席 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：15]
⑯ 6月4日	夜は講演。演題「英独間の国家概念の違いについて」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑰ 6月11日	夜は講演。演題「君主の権力と国王大権」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑱ 6月18日	夜は講演。「君主の大権、王位継承と連邦議会」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
⑲ 6月17～31日	「ワレンシュタインの陣営」が上演できない、とクローロから聞いた 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：16]
習志野俘虜収容所	
⑳ 9月16～30日	シュルツから、日本人がここへの移転の際にユーバーシャル博士の日記を没収し、日記は全部取られるかもしれないと聞いた。だから僕の日記を秘密の箱に入れて安全を図った。10月7日にホルヒがこれを出してきた。この間起った出来事の記録を書き入れるために、ホルヒに時々僕の日記を取り出してきてもらう 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：18]
㉑1915年9月26日	ユーバーシャル博士の、「ドイツ国家について」の講義の続き 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉒ 10月24日	ユーバーシャル博士の講演の続き。「ドイツの国家概念について」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉓ 10月31日	「ドイツの国家概念」の講義が終了。次に「日本の国家概念」へと進む。日本の皇帝の誕生日 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉔ 11月1～12日	クロー氏はユーバーシャル博士の講演の後で、天皇戴冠祭のため西郷中佐が10日休暇だと発表した(つまり僕もそれまで部屋がもらえないということだ) 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：19]
㉕ 12月17日	講演「日本の教育」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉖1916年1月8日	講演「日本の学校」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉗ 1月14日	講演「世界大戦下の日本の地位について 駐英大使大隈とその弟子タカトーについて」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]

⑳	1月21日	講演「ドイツ人と日本人の精神的な違い」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉑	2月11日	講演「ドイツ人と日本人の相違」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉒	2月8日～ 27日	ユーバーシャル博士の講演「日本人の目立った特徴，中でも脚がまがっていて内股であることについて」 資料：C. フォーゲルフェンガーの日記 [習志野市教育委員会 2001：152]
㉓	3月2日	講演「日本人の栄養について ドイツ人と比較」1911年のある統計によれば，日本人労働者の平均の 日収は60銭で，その内3分の1の20銭を食糧費に使う。ドイツ労働者の一日当り平均賃金は（金属労働 者と左官職人）3.60から4.00マルクで，その内90プフェニヒを食糧費に使うので，4分の1だ 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉔	3月24日	今晚は，また講演会が催された。話題は「さまざまな日本の男たちについて」だった。その他に，西郷 という名前についても語られた。今の我々の西郷の父親について，我々は初めて知った 資料：C. フォーゲルフェンガーの日記 [習志野市教育委員会 2001：152]
㉕	3月31日	講演「日本の憲法について」 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉖	4月7日	「日本について」の講演はさらに進む 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉗	1917年10月31日	宗教改革400年を祝うために，長い間器楽曲，合唱，講演の準備をしてきた。（中略）弦楽オーケストラ と合唱とハーモニウムの演奏。次にユーバーシャル博士の講演，ミリエス氏のヘンデルに始まるオーケ ストラ音楽の成立に関する講演が続いた 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：32] ユーバーシャル哲学博士の非常に興味深い講演は，ドイツ民族が400年前から始まった新時代に入っ てから，いかに発展してきたか，というものだった 資料：[エーリッヒ・カウル 2001]
㉘	1918年2月4日	ユーバーシャル博士が，ノヴァクが衛戍病院で亡くなったという知らせをもたらした。みんな言葉を失 い，悲しがっている。（後略） 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：35]
㉙	10月14日	ユーバーシャルが，鳥小屋の周りに柵と道を作らねばならないという日本の命令を持ってきた。それで 僕の小屋に行って壁と柵を少し前におした 資料：ハインリヒ・ハムの日記 [カール・ハム 2003：45]
㉚	11月13日	停戦条件が，我々にも明らかになった。これらは，日本の新聞から翻訳されたものである。条件を聞いた とき，我々の誰にも戦慄が走った。我が収容所の予備役将校U博士（註・ユーバーシャル）が， 兵舎の一棟で，故国の置かれている状況について講演してくれた。我々は静かに耳を傾け，こうして教 えてくれたことに感謝した。もし，より多くの将校が，我々が故国の状況に興味を持っていることにも 気にかけてくれていたら，この収容所内で起こった多くの派閥間の不和も，容易に解決しただろうに。 U博士はただ，故国の革命がいかに進展しているかを語り，政府や政党に対して何か態度表明するこ とは避け，こう結論した。「事態の現在の状況の下では，首相が穏健な社会主義者エーベルトである新 政府が実力を発揮し，国の静穏を維持してくれることを望むばかりである。」— 資料：ノーマイヤーの日記 [習志野市教育委員会 2001：169]
㉛	日付なし	ユーバーシャル博士は，日本の大阪大学の講師だったが，国家学と文学史の講義をしてくれた。これ らの講義にも，私は参加した。ユーバーシャル博士は，戦争の勃発の際に青島にやって来て，兵士と なったのだ。彼は，日本語は話すのも書くのもマスターしていたので，収容所では通訳の役さえ果たさ なければならなかった。彼はまた，収容所内であらゆる種類の一連の講演を行い，それは例えば，ゲー テについてであり，日本についてであり，その他いろいろであった
㉜	日付なし	（戦友フリッツ・レムケについて）彼はユーバーシャル博士から個人教授を受けており，博士から難 しい論文のテーマを与えられては見事に解いていった
㉝	日付なし	（戦友シュミットについて）東京のジューメンズ・シュッケルト社の忠実な社員だった。彼は気取り屋と 見られ，あまり打ち解けない男だった。彼はユーバーシャル博士のもとで熱心に日本語を学び，ホッ ケーに興じていた ㉞～㉟資料：カール・クリューガーの回想録 [ユルゲン・クリューガー 2003：64，72，76-77]

参考資料

- 1) エーリッヒ・カウル著，小阪清行訳 2001（私家版翻訳）『青島の海軍兵士，日本での捕虜1914年から1920年』 http://koki.0.007.jp/06.8.31_Kaul_ja.htm
- 2) 大河内朋子 2005「エーリッヒ・カウル『青島の水兵・日本の俘虜』1914年から1920年」『『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』研究』3：93-101
- 3) カール・ハム編，生熊文訳 2003「ハインリヒ・ハムの日記から」『習志野市史研究』3：3-53
- 4) 習志野市教育委員会編 2001『ドイツ兵士の見たニッポン—習志野俘虜収容所1915～1920』丸善
- 5) ユルゲン・クリューガー編，ディルク・ファン＝デア＝ラーン訳 2003「カール・クリューガーの回想録から」『習志野市史研究』3：59-111

講義がなされている。そのほかりュットゲンス（Lütgens）博士からフランス語を個人教授してもらったり，海軍中尉から数学や三角法，上海独華大学の先生だった予備役中尉から歴史やドイツ語の講義を教わ

たりすることもあった²⁴⁾。技師長による内燃機関に関する講演（1916年2月23日），クーロ中佐による日露戦争の講演（1916年5月5日）²⁵⁾，ヒンデンブルクの会戦の講演（1916年6月21日）²⁶⁾もあった。1917年10

月31日には、「宗教改革400年記念の夕べ」が開催された。指揮ミリエス (Millies) による演奏会の合間に行われたユーバーシャルの講演は、ドイツ民族が400年前から始まった新時代以降、いかに発展したかに関する非常に興味深い講演だったという (表3-35)。収容所内の教育は、俘虜解放後の生活をにらんだ準備学習として英語やロシア語、日本語や理数系のプログラムが多数あったが、東京・習志野に関していえば、ユーバーシャルの大学的日本学教育に大きな特色があった。いいかえれば、それはユーバーシャルにとっての、将来ドイツで実践する日本学教育の準備学習でもあったといえよう。

通訳としてのユーバーシャルは、病院で亡くなったノヴァク (Nowak) の死を俘虜仲間に伝えたり (表3-36)、「鳥小屋の周りには柵と道を作らねばならない」(表3-37) といった日本の命令を伝える役目も担った。1918年11月13日のJ.ノーマイヤー (Neumaier) の日記には (表3-38)、収容所内の俘虜たちが、ヨーロッパの複雑な社会政治情勢のゆくえを気にかける様が綴られる。一口にドイツ軍俘虜とはいえ、当時の領土関係から収容所内にはポーランドやデンマーク、ベルギー、フランス系など様々な兵士がおり、相克があった。陸軍の文書分析を通して「一般俘虜」との「隔離」がなされたケースがみられたこと²⁷⁾、『板東俘虜収容所』の著者・林啓介が、ほぼ同時に文芸作品として『ユダヤ人の墓』を著したこと、安宅温がドイツ占領下に広大な農地を失ったポーランド人俘虜ヘルトレ (Haetle) の思い出を児童文学にしたこと²⁸⁾などはその一端を示している。教育・通訳者として日独の間につつまユーバーシャルに祖国の社会状況が大きくのしかかっていたことは十分推察されるのである。とここまで述べてきて、一つ気になることがある。複数の俘虜日記が残る中、彼自身は日記をつけていなかったのだろうか。この疑問についてハインリヒ・ハムの日記には、習志野に移動した1・2週間後 (1915年9月16~30日) に重要な記述がある (表3-20)。シュルツからの伝聞として、日本人が習志野への移転の際ユーバーシャル博士の日記を没収し、日記は全部取られるかもしれないと聞いた、そのため秘密の箱に入れて安全を図り、仲間と連携して数週間まとめて書く方法をとった、と綴られる。ハムの日記は原文ではないものの、これに基づけば、ユーバーシャルは日記をつけていた可能性が高い。自分の日記の没収によって仲間の日記を守ったのだろうか。収容所生活の後半は講義に関する日記が減少している。

個人授業が増え、講義が減ったのか、次に述べるラウベの生活が魅力的だったのか、病気の蔓延や日独情勢の変化が影響したのか、その理由は不明である。

1915年の熊本・東京・姫路の収容所閉鎖に続いて、1917年には国内収容所の統合閉鎖が進み、俘虜たちは久留米・板東・青野ヶ原・似島・習志野に集約された。そのため1918年2月には、日本美術文化の研究者ルンプ (Rumpf) が大分から習志野に移ってきた。彼は習志野で日本の民話や民謡などを収集し、のちにドイツで出版している²⁹⁾。1918年3月には福岡からワルデック総督以下将校30名、下士卒76名の一行が習志野に移った [東京朝日新聞1918年3月26日]。そこにはユーバーシャルと同じ職位であった参謀本部通訳/予備陸軍中尉で法学博士のF.ハックがいた。ハックは福岡で4名の将校の逃亡の手助けをしたかどで軍法会議にかけられ、13カ月の刑に服して戻っていたのである。

収容所のクラインガルテン

習志野収容所では、日本の生活に慣れ、日本に留まって商売を開始しようという者も現れていた。東洋美術通としてドイツでは知られたヴェークマン (ワーグマン、ウェークマン、ウェーグマン) は、村田商会と特約し、広重や歌麿の版画収集に熱心である。春がきたからと、敷地にあずまやを建てたり、花壇を整備したりと大分浮き浮きしている [東京朝日新聞・1918年3月27日]。この記事にある通り、長い俘虜生活後半を支えたのは、所内の空地に個人や仲間の空間を設け、集団から離れて趣味や勉学にいそむ過ごし方であった (写真2)。敷地内にあずまやを建て、小区画の花壇や蔬菜をつくる活動は、習志野に限らず、青野ヶ原や板東などの収容所でも展開している。これは当時ドイツで普及していたクラインガルテンの移入であろう。直訳すれば「小さな庭」を意味するクラインガルテン (Kleingarten) は、日本語では小菜園・分区小園・市民農園・市民庭園などと訳されてきた。ライプツィヒでは1830年代から救貧を目的としたクラインガルテンが展開し、1864年ライプツィヒにその最初の協会が創設された³⁰⁾。工業化が進むドイツでは、自家消費的な蔬菜や草花を栽培し、土に親しむことが子供の成長や都市市民の健康に良好な効果をもたらすとされ、ライプツィヒの医師シュレーバー博士の提唱のもと、小さなあずまや (ラウベ) を設けた独特の農園空間が、子供たちの運動場や遊び場とあわせ急速に広がっていく。そのためクラインガルテンはドイツ発祥とみる向

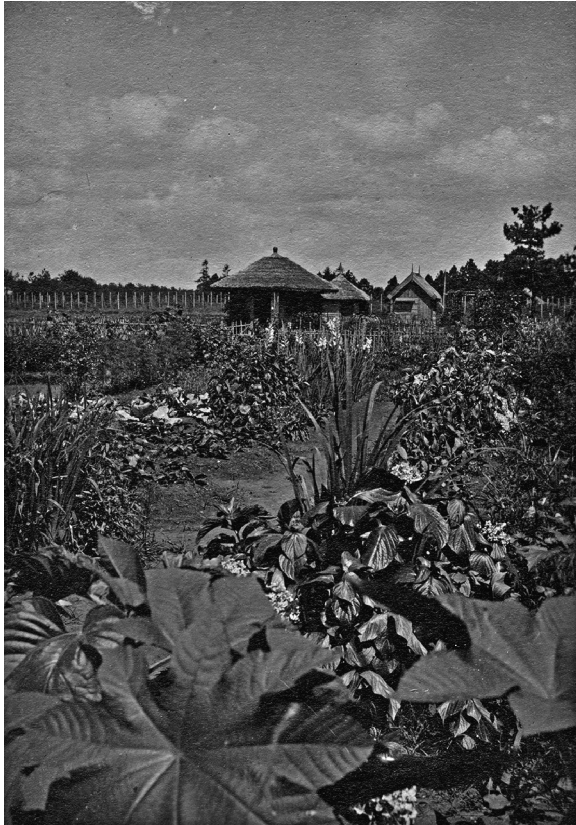


写真2 習志野収容所内に生まれたクラインガルテン (No. 31)

1916年から始まったあずまやであるラウベや菜園造りは、俘虜を夢中にした。ラウベが建ち並びはじめ、グラジオラスなど草花や蔬菜がよく育っている。1917年夏～1919年夏頃か

きもあるが、同様の取組みはイギリスやフランスなど先進ヨーロッパ諸国にみられたという³¹⁾。

1910年代のドイツでは、食糧難を補う意味から一層盛んになり、関連する法整備が進められて普及に拍車がかかった。習志野では風見鶏のラウベ、地下室をもつラウベ、日独二つの表札を掲げたラウベなどが出現した。ヴェークマンのラウベは室内の壁を畳表でおおい、歌麿の浮世絵がかかり、日本文の書籍もある [東京朝日新聞 1919年 5月19日]。将校下士のうちにはラウベを自費で建て、そこで起臥する者が習志野では20余名おり、ヴェークマンもそこで住まいしながら日本と支那の美術に関する研究を進め、博士論文をまとめていたという。ハインリヒ・ハムの日記によれば、1918年春からラウベを作りはじめて9月、初めて庵生活を楽しんだ。夏のあずまや(ラウベ)に冬のあずまやもあった。もっとも建てられるのは木製のあずまやで、凶面は提出しなければならない、大きく作りすぎた人は壊される、電気も火も使ってはならない、滞在は夕方の見回り時間までで、寝泊まりしてはいけない、バケツに水を置いておくことなど³²⁾、様々な決まり事

や誓約、その変更があった。

クラインガルテンは、1918年当時の日本人にはまだ馴染みがなかった。1926年には全国に先駆けて大阪で市民農園が創設され、相応の展開を見せたが、ヨーロッパと同様には定着しなかった。園芸雑誌『庭園と風景』にクラインガルテン特集が組まれたのは1934年、それには1933年ドイツ・ハンノバー(ハノーファー)のドイツ園芸博覧会に出品されたクラインガルテンの絵葉書写真やラウベのスケッチなどが紹介されている³³⁾。ラウベ風の宿泊施設と農園を貸借する滞在型市民農園が、日本型クラインガルテンとして名前も多くがそのままに長野・山梨・兵庫の山里、愛知の離島(写真3)などおよそ60か所以上でみられるようになるのは、1990年代以降と比較的最近のことである。第一次大戦期の俘虜たちがもたらした西洋文化にはソーセージやパン、第九の音楽などが今日伝わるものとしてよく知られるが、クラインガルテンもまたその先駆けの一つだったと考える。

スペイン風邪と俘虜解放

1918年末から1919年にかけて、世界中で猛威を奮ったスペイン風邪は、収容所内で多数の罹患者を出した。習志野で亡くなった俘虜30名のうち25名はこの数カ月のスペイン風邪が原因だったという³⁴⁾。西郷寅太郎所長もスペイン風邪で死亡した一人とみられる。すでに1918年春のインフルエンザ禍より肺炎を患い、常に収容所につめることができない健康状態で、一旦は帰隊したものの、夏には再発し、年明けて1月1日に死亡したとされる。「寅太郎が亡くなったのは、1月1日、医者が止めるのも聞かず、自分が行かずして誰がいく、と無理を押し出かけて、馬にまたがり、もうじき帰れることを告げたその日に亡くなった」と母が語っているのを筆者は聞いたことがある。この内容は、習志野での俘虜だったフォーゲルフェンガーが後日語った記憶と酷似する。「高熱を出していたのに医者の忠告に逆らって、馬にまたがって収容所中を回り、彼の捕虜たちに新年の祝辞を述べ、まもなく故国に帰還できることを祈ってくれた後」、死亡したその日時は1月1日16時だった³⁵⁾。母はフォーゲルフェンガーの談話が載せられた『ドイツ兵士の見たニッポン』を読んではいなかったが、「習志野の元俘虜のことが公になった頃聞いて知った」と語っている。文字をもつ時代の伝承とはそういうものであろう。

当時の新聞には1月3日を死亡日とする記事が掲載されている。しかし、親族による命日に関する証言や



写真3 愛知県西尾市の佐久島ラインガルテン
2016年12月撮影 滞在型のラインガルテンで、前庭に作物栽培ができる。ラウベは手作りではない

資料の照合から死亡日は1月1日であったという³⁶⁾。正月という天皇祝賀の日に死亡したことは、秘匿すべきことだったのかもしれない。複数ある俘虜の日記にも当日を示す内容は確認できていない。死亡日の変更は、戊辰戦役で倒れた吉二郎の場合にもみられたことだった。「戦死」と刻まれる墓碑の日付8月2日と、8月14日柏崎の野戦病院で死亡したという伝承には12日もの開きがあった³⁷⁾。ゆえに筆者には寅太郎の死亡日も時間も、直接の経験者であったフォーゲルフェンガーの記憶そのままに受けとめてよいように思われているのである。

歴史研究者・ボアマンによれば、未公開のクーロ中佐の日記には、西郷寅太郎のことがしばしば登場するという。寅太郎は「紳士的で心の温かい人物だが、衛戍司令部との交渉に弱い」人物であること、プロイセンの陸軍士官学校を卒業した彼は、所長に着任したことをあまり嬉しく思っていなかったこと、「元生徒として自分が恩師の警備をしなければならないのを非常に悲しく思う」といったのを覚えている、といったクーロの日記の内容をボアマンは紹介している³⁸⁾。またクーロの日記には「皆、私たちの日常生活をできる

だけ快適なものにしようと最善を尽くしてくれた。収容所長だった西郷・山崎、私の友ドレンク・ハーン（ジューメンズ・シュッカート社、在東京）との良好な関係のおかげで、生き延びることができた。彼らは常に私たちの要求を聞き入れてくれた」とも。帰国したクーロ中佐は1920年大佐に昇進した。しかし、その後実際の任務に就くことはなかった。それでもクーロの戦争は終わらなかった。アジアでの経験を忘れることができず、晩年を一人で過ごし、1943年に死亡したという³⁹⁾。

多数の犠牲者が出たスペイン風邪は、「感冒猛烈 最近二週間に府下で千三百の死亡 新患者日増に殖える」[1919年2月3日東京朝日新聞]という有様だった。当時は流行性感冒とのみ記載され、スペイン風邪の名がまだ流布していたわけではない。甲南学園創設者の平生夙三郎も、日記の中で「2月2日・・・流行性感冒ハ今ヤ帝都ヲ襲ヒテ其猛威ヲ逞フシ、全都人口ノ半数ハコノ病ニ冒サレツヽアルガ如シ。過去二週日ノ死亡実ニ千參百ニ及ビ、為メニ人心恟々タルガ如シ」⁴⁰⁾などと繰り返し記し、この状況を案じた。

世界的感染状況の中、改めて注目されるのは、収容

所内のラウベと菜園空間が、罹患者の健康回復に役立っていたことである。ラウベは誰もがもちえたわけではなかったが、病院から退院後のリハビリにも、集団からの隔離にも都合のよい空間だった。日光浴を楽しみ、歩く練習をし、足を元通りにすることができた⁴¹⁾。他方、徳島の板東俘虜収容所では健康保険組合など福利厚生⁴²⁾の互助活動が実践されていたことも注目に値する。スペイン風邪の治療にはこれが役立った。板東収容所跡近くにはドイツ館と併設して、神戸に生まれ徳島で育ち、後に牧師ならびに社会活動家となった賀川豊彦の記念館がある。賀川が1920年板東を訪ねた時には俘虜たちはすでに帰途についていたが、俘虜のクラウスニツア (Clausnitzer) から酪農と畜産を学び、俘虜が設計した牧舎を継承していた船本宇太郎を介して、賀川は収容所内で実践されていた酪農やハム作りを教わった。また収容所で実践していた健康保険組合の大切さを知ったという。これは、後に防貧を理念とする賀川の都市部での労働運動や消費者組合活動へと繋がっていく。この購買組合の必要性は、平生三郎がかねてから指摘し、支援していた事業であった。賀川が設立に尽力した神戸と灘の2つの購買組合はその先駆けとなり、平生は灘購買組合の理事として定着を支えることとなった。

長かった俘虜生活も1919年ようやく解放の兆しがみられた。アルザスロレーヌ地方の出身者は一部、1918年に解放されていた。1919年7月にも一足早く帰る人々がいた〔読売新聞1919年7月9日〕。さらに12月から翌1月にかけてほとんどの俘虜が解放された。ワルデック総督を乗せた1920年3月の家族船まで、計6隻の帰還船で神戸港や横浜港から故国に戻った。帰り支度が始まった1919年11月、ヴェークマンは記者の取材に応じ、日本に残る意向を語っている (表2-⑤)。また1919年12月23日の記事には、「習志野大学教授と呼ぶる」ハックとユーバーシャルが並んで写真に写り、解放後の見通しを述べている (表2-⑥)。その後、ハックは戦争で中断していた貿易再開の水先案内人として日本の企業と契約をかわしたのち帰国⁴²⁾、一方ユーバーシャルは、元の職場である大阪医科大学に復帰した。当時日本にいたドイツ俘虜4406名のうち、日本への滞在を望んだ者は全体で500名程だったという〔東京朝日新聞1919年11月7日〕。実際にはドイツ軍および同盟国のオーストリア・ハンガリー帝国の軍人たちが含まれ、日本へ移送された俘虜数は4688名にのぼるとされる⁴³⁾。このうち解放当初、日本に残ったのは200名以上、200名以上が蘭領印度 (現インドネシ

ア) に渡ったという⁴⁴⁾。つまり俘虜の1割程度がハックの語った「生活難の喧しい故郷での生存競争」を避け、異国で活路を模索していたことになる。習志野の俘虜・クリューガーの回想録によると、帰国数カ月前の収容所内ではジャワでの勤務が熱心に勧誘されていたという⁴⁵⁾。

平生日記にみるドイツ軍俘虜

1914年8月頃より第一次大戦の戦局のゆくえを注視していた平生三郎は、青島陥落や将校について日記に綴っている。1914年11月8日、人命を両軍ともに損なわずに青島が陥落しえたことを朗報とした翌9日、それが無抵抗の陥落であったことを知るや、「意外」とし、ワルデック総督は、モルトケ堡壘にいたが、陥落とともに市中に逃げたようである、日本魂を有しない彼等は、降伏をもって武士の恥辱と自覚しないものようである、「我武士道ニ於テ、如何ナル理由アルモ降伏若クハ捕虜タルコトヲ容認セズ。力尽キタルトキハ自尽シテ生ナガラ敵手ニ捕ハルコトヲ以テ最大恥辱ト為スノ教訓ハ我軍隊ガ常勝軍タルノ素因ヲ為スモノニシテ、コノ精神ハ永久ニ保存涵養シテ他日白禍ヲ全滅セシムルノ機会ヲ期待セザル可カラズ」と綴る。その彼等にたいして、「我仁慈ナル陛下ハワルデック以下将校ニ佩刀ヲ許サルトノ御詔アリシト伝聞セリ」とし、陛下の御心はあくまで慈愛同情に富んでいるが、武士道を解しないドイツ将校に、武士の慣例をもって対処するのは、慢心を助長させるものであり、「決シテ彼等ヲシテ慈恩ヲ感ゼシムル道ニアラズ」、そのため「君側ノ人士ハ宜シク陛下に奏聞シテ、コノ恩命ヲ阻止スベキナリ」とした。

1899年のハーグ陸戦条約によって俘虜への人道的扱いが重視される状況下、彼らを日本的武士道の精神で迎え入れることにたいし、平生はいささか疑念を抱いていた。8日は住吉・御影村で共に連合祝捷提灯をぶら下げての行列が練り広げられた。旗や提灯、山車等の祝捷のお祭ムードの中、11日の日記には、地元村長が、過日青島陥落の際、村民をあげて旗行列をしたのに、倶楽部 (観音林倶楽部のこと) では何ら款待をしていない、と罵ったのを、平生は聞きづてならないと反撃したことを綴っている⁴⁶⁾。

11月17日には、かのワルデック少将が門司に到着し、福岡俘虜収容所に送られた⁴⁷⁾。彼は敗軍の将兵を語らざるの態度をとったが、新聞記者には青島開城を制止できなかったことを弁明している。堡壘には弾丸がつき、日本砲兵の弾着は正確で、軍艦は弾丸尽きて撃沈

したなどを語るが、日本歩兵の突撃にたいして銃槍をもってこれを迎撃しなかったのか？ また、なぜ突撃前砲弾を乱射したかを説明していない。かの独将はこのような場合にもなお利害得失の打算により開城し、生命を保存するのが利であると断定しているものではないか。ドイツ魂は、日本魂をもって解してはならない。ただ、我が政府のような卑劣な行動によって捕虜となった独将及び其士卒を「厚遇スル」のをみて、それが何の故か解せない。このような「獸の軍人ガ、何ゾ日本武士ノ高義ヲ解センヤ」と憤慨した。

平生夙三郎の伝記を著した河合哲雄は、平生の人物像を「明治時代の教育を受けた忠君愛国主義者であり、皇道主義者であつたといえ一括して言い尽せるかと存じます。割切つた言い方ではあります、平生さんは所謂日本主義者であつたのであります」⁴⁸⁾とまとめあげたように、日記の記述には、そうした平生の精神性が表れている。

俘虜にかかる待遇と賠償については、東京朝日新聞1914年11月26日に、西郷収容所長談が掲載された。俘虜の月給は「クーロー中佐の百八十三円を筆頭として中尉四十七円、少尉四十円、准士官日給四十銭、下士以下は日給三十銭の規定」であり、いずれも「我国軍人の各官等に準拠」する。これは、日露戦争のロシア国俘虜待遇法と異なることなく、「飽迄武人の面目を保たしむるを目的とせる俘虜取扱規定」に拠る。収容待遇に要した一切の費用については、欧州戦乱の終息後ドイツ政府が賠償の義務を有することも述べている。俘虜はあくまで武人の面目を保たせる目的で、法律に基づき扱われたというのである。

習志野でのドイツ俘虜関連の資料収集と研究を長年進めてきた星昌幸は、日本にとって戦時国際法が大きな課題となっていたこの時期、野蛮国と見られないための体面が重視され、政府や陸軍が俘虜優遇に熱心であったのにたいし、世論や新聞論調はむしろそれに批判的であったことを当時の新聞報道から見出している。たとえば、福岡では日赤支部にあった某宮様のベッドをワルデック総督に与えたということで世論の攻撃を受けたという⁴⁹⁾。移動中の「観光気分」の俘虜たちの取材記事(表2-②)、平生が疑問を呈した「陛下による帯剣の恩命」もその一つであろう。11月26日の東京朝日新聞によれば、松山俘虜収容所では将校一同に佩剣の取上げを申し渡している。星は、1918年3月27日東京日日房総版に掲載された西郷寅太郎のワルデック評に「青島陥落の際討ち死にでもすれば立派だっただろうが、それも出来ず、俘虜となった、だから同情を

禁じ得ない」と語ったことにふれ、「討ち死にでもすれば」の部分に西郷隆盛の最期が重なって見えると指摘した⁵⁰⁾。

平生にすれば、利害得失の打算により開城したドイツ軍に厚遇で対処することは、合点がゆかない問題だった。すなわち、同情論も批判論も双方が、日本の「武士道」的精神、「力尽キタルトキハ自尽シテ」、生きながら敵手に捕われることを最大の恥辱とする精神を拠所にしてきたことになる。他方、ボアマンは、降伏の予想外の早さは当時の日本人の理解を超える「文化の問題」であったと指摘する⁵¹⁾。結果として日本は、大量の俘虜受入れへの備えを欠き、寺や学校など急拵えの収容所によってしのぐ必要に迫られた。

加えて当時の日本にとって、ワイン醸造やパン製造、畜肉加工、工作機械など俘虜たちが有する先進技能は直に学びたいものだった。1917年6月29日の平生日記は、愛知県熱田の工場に据え付けた機械の運転ができず、運用を心得た俘虜が久留米の収容所にいると聞き、俘虜にその運用を乞う一幕があったことを伝えている。当時第八高校にいた平尾誠一からの手紙で平生はこの事実を知る。平尾誠一は、後に東京帝国大学の機械科を卒業し、東芝に勤めた人物である。平生夙三郎が実施していた学生の学資支援を主たる目的とする教育事業・拾芳会の恩恵をうけていた一人であった。知事から陸軍省に派遣を乞うたが、俘虜の力を借りずして運転できないことは国辱であるため、認可はできない。さりとして機械が動かないと事業を中止しなければならない。その運用を完全にするため、俘虜に実見してもらうこととして、久留米から監視員が付き添い俘虜を呼び寄せた。工場では運転中止の醜態を覆うために汽缶に火をいれ、煙突からさかんに煤煙をはかせつつあるのを、俘虜はその揚がれる黒煙を見て、このような煙の揚がり方では機械は運転できないと戯笑した、とある。実に工業的知識が幼稚であることはこの一例でも知るべく、このような事実はますます自己の奮励を促すもの、と20歳に満たない平尾が送った手紙に、青年の着眼の正確さを平生は喜び、前途多望と日記に綴った⁵²⁾。

1919年1月13日平生は、ドイツの政界が混沌とし、鎮静の模様なく、過激派と反対派の衝突が独りベルリンのみならず、他の大都市に及んでいることにふれ、ロシアと同様、「独国ノ前途ハ惨憺タルモノノ如シ」⁵³⁾と日記に記す。ハックや他の俘虜たちが示した不安と同様、平生の目にもドイツの食糧難の窮状と政局の混乱ぶりは強く認識されていた。

3. 日独交流とドイツ語教育 —大阪医科大学復帰

5年に及んだ収容所生活からユーバーシャルが職場復帰した時、大阪高等医学校は、新大学令により1919年11月大阪医科大学となっていた。1920年2月5日、大阪の中之島公会堂で府市官民2000人を招待して開催された新大学公布記念祝賀会には、佐多や北里らと共に、復帰したばかりのユーバーシャルが講演を行っている⁵⁴⁾。大戦後、佐多とユーバーシャルが注力したのは、学術・文化・産業等にまたがる日独関係を築くための交流活動だった。佐多は、ドイツが戦争に負け、孤立していた中、ユーバーシャルらと図って来朝1ヵ月目のゾルフ (Solf) 大使を関西に迎え、1920年12月、神戸・大阪の日独協会の発会式を挙行了⁵⁵⁾。ドイツから著名な大家が来日した時には必ず招待し、講演会を開催するなど、毎年の園遊会とあわせ、定期的な交流に発展させた。

1922年12月11日に大阪都ホテルで開催された佐多愛彦主催のアインシュタイン博士の歓迎会は、ゾルフ大使や平生鈞三郎も出席していた。平生日記を見ると、「最モ謙讓ナル態度ヲ以テ終始笑顔ニ喜色ヲ浮ベテ挨拶」するその面影は超人的であり、それまで学理を理解できないにもかかわらず、3円もの聴講料を払って集まる群集の愚かを笑っていたが、本日接して、「日本人ノ如キ科学的知識ト哲学的思想ニ乏シキ国民ガ如此キ偉人ニ接スルコトガ其学説ヲ解セザルニモセヨ覚ルコトアルベシ」とすっかり自らの考えを改めるほど感銘を受けていた⁵⁶⁾。佐多と平生は、大阪倶楽部の会合に列席し、教育改革の意見を披露して賛同をえたり [1923年3月19日]⁵⁷⁾、同倶楽部で、佐多愛彦が愛婿の医学博士・螺良四郎を紹介するため開催した大宴会では求められるまま挨拶してもいる [1925年6月26日]⁵⁸⁾。大阪医科大学病院の落成式に招かれた折には [1924年3月1日]、大阪病院の施設の立派さは日本唯一と称し、府費に頼らず病院の収入で実現した佐多の経営能力を高く評価する一方、一面観察すれば、「如何ニ病メル者ノ懐ヨリ大ナル搾取ヲ為セシヨ見ルベシ」とし⁵⁹⁾、富豪の喜捨、府市民の税金で建設されることの意義と偉大なる功業を全うして勇退する佐多の後を引継ぐ者の、倍旧の艱難と戦うことの見通しを冷静に分析していた。この新病院建設の背景には、1917年2月19日失火により病院が焼失した出来事がある。幸い1人の死者も出さなかった。佐多の類まれな統領

的性格と部下を慰撫し、部下も信じてその業に熱中すること類まれとした上で、だがその職責は重大であり、建築物は保険金とその補填で再築できるが、欧州戦乱中の時世、医療機械や書籍を再びえることは困難である。佐多であれば、その熱誠で再建し、府民も佐多に資金を捧げるだろうから、一層完全な病院を提供するよう、佐多に見舞状を送った、と1917年2月20日の平生日記にはある⁶⁰⁾。

病院建設への強い志は、佐多へのエール以上に平生自身がこれから進むべき道だった。1909年産後の妻を失った際の医師への不信、1922年門下学生がチフスにかかった時、大学病院の診察をうけようとしたが、宿屋その他のブローカーを経て、1回50円以上の高額の診察料を払わねばならないという話を聞いた平生は医者への不仁に憤り、いよいよ病院建設の計画を実行しようと考えていた⁶¹⁾。そしてその志どおり、1931年1月私立の甲南病院を建設する。佐多が建設した大阪医科大学病院の落成式は、平生自らが理想とする病院像を固めていく視察の機会となっていた。

ユーバーシャルのドイツ語教育

ユーバーシャルが大阪医科大学に勤めるかたわら、旧制甲南高校のドイツ語非常勤講師となるのは1924年9月のことである。当時入学は9月始まりだった。同校は1919年に開校していた旧制甲南中学校を母体に、1923年設立したばかりの高校で、1924年7月には小森校長にかわって丸山校長の新たな体制による人事が進められ、高等科2年を設けるために新任教員を必要としていた時期だった⁶²⁾。

1925年1月1日、ユーバーシャルは同じ大阪医科大学の予科教授である西原泉之助と共著で教科書『独逸学語入門』を発刊する (表1-⑦)。高等教育をうけようとする、とくに心理学や自然科学を学ぼうとする学生向けに細胞、眼球や視覚、色彩、ゲーテのファウストなどの実例をのせた同書には、新たに外国語を学ぶ者は、「マズ暗唱ヨリ入ルヲ最良法とす。暗誦スベキ文章ハ内容アルモノヲ根本的ニ知得セザル可ラズ」 (表1-⑦: 99) と記している。もともと本書は1年前に出版すべく準備されていたが、1923年9月に発生した関東大震災によって組版中の原稿が焼失したため、翌年新たに稿を起こしたという。発音を重視したユーバーシャルの語学教育は、後述のように甲南学園の教え子たちの間でも強く記憶され、本書には鏡と箸もっての発音練習が登場している (表1-⑦: 89)。しかも意味なく練習するのではなく、暗唱すべき文章は

内容のあるものを根本的に知得しなければならない。そのためには、注釈訳文だけでは不十分であり、必ず教授者の詳細な講義が必要である。ドイツ語文例、詳細な注釈、日本語の訳文という3部構成で作られた本書の方法は、後に彼が著した『松尾芭蕉とその日記“奥の細道”』（表1-⑮）に貫かれた。この本は芭蕉の学芸様式に関する概説に続き、『奥の細道』のドイツ語訳文、日本文と音読を可能にする日本文のローマ字表記、注釈で構成されている。

ユーバーシャルのドイツ語教育については、当時語気強くローマ字教育のあり方を批判して憚らなかった向軍治が『国を亡ぼす教育Ⅰ：羅馬字』の結びに、大阪医科大学予科生との直接対話によってえた内容を披露し、共感をもって論じている。

「外国語の教え方にはいろいろ説がある。この春、大阪医科大学の予科生に会った。ドイツ人の先生は、何を教えているかと聞くと、「これから習うので、よくわかりませんが、会話より名文の暗記のほうが頭のためになるとおっしゃって、ドシドシ暗記をおやらせになるそうです。なんでも心理学のできる方で、頭のことは詳しいということです」という。どうだ？聞き伝えて間違っても、ドイツ人の言ったことには、意味がある。（中略）この学生がその先生の意味をよく飲み込んでいないこと、わかりきっている。仮にこの言葉どおりの教え方としても、その言葉に nonsense を含んでいないという強みがある。その先生は、ことによると、ドイツの Schliemann の独^{ひとり}案内の主義を信じている方かもしれない。Schliemann にしても、この言葉そのままにやるのではない。やはり会話はやるのである。Prof. Ueberschaar（その先生）もきっとそうだ。ただ、Mr. Palmer 一派の Nonsensical Conversation をやらないだけである。Prof. Ueberschaar のいうことが一番本当だ」（*原文はすべてローマ字表記）⁶³⁾。

1923年12月に出る予定だった本書もまた、関東大震災で稿を新たに、出版が遅れた。文中の Schliemann は、貿易商から転じてギリシャ神話のトロイア遺跡を発掘したドイツ人考古学者 H. シュリーマン（1822-90）のことである。シュリーマンは発掘に投じる以前の1865年、世界万遊の途中、清国から日本に來日し、1カ月の滞在旅行記を鋭い観察と文明評で書き残している。貿易の仕事柄必要となる多数の言語を自在に操ることで知られ、半年で英語、次の半年でフランス語を熟達した後、スペイン語やイタリア語を修得するのに6週間以上を必要としなかったと述懐する。独学の極意は、「非常に多く音読すること、決して翻訳しな

いこと、毎日1時間をあてること、つねに興味ある対象について作文を書くこと、これを教師の指導によって訂正すること、前日直されたものを暗記して、つぎの時間に暗唱すること」⁶⁴⁾だった。名文を暗記させ、劇を演じ、朗読をする、そして発音を鍛える、こうしたユーバーシャルの教育は、習志野収容所でのドイツ劇や朗読、大阪医科大学の予科生説明、甲南高校教員子の記憶、と異なる話者から一貫した教育方針として浮かびあがる。

一方、彼がこの時期手がけたもう一つの取組みにはドイツ語による専門雑誌の編纂があった。佐多愛彦は、第一次世界大戦後のドイツ経済界の疲弊により逼迫した学会を援助する目的で私費を割き、月刊雑誌『日独学芸』をドイツの出版社から出す計画をたてていた。ちょうど在任10年がたち、1922年秋より半年の賜暇を大学からえてドイツに帰国することになったユーバーシャルは⁶⁵⁾、本雑誌の創刊に向けてドイツ側の執筆者や編集等の交渉を重ね、今後の協力と援助をえる手筈を整えた。ユーバーシャルは雑誌の創立以来永く協会の常務幹事として会務に尽し、「大なる貢献を為した」⁶⁶⁾。そう佐多の伝記に書かれる程、ユーバーシャルの功績なくして本雑誌の刊行は実現しえなかった。1923年7月に創刊号が発刊され、1927年の佐多の3度目の洋行時に一旦終了した後、1928年10月から『新・日独学芸』として再開され⁶⁷⁾、発刊は10数年にわたり継続した。一方、ユーバーシャルは、日独双方の人やお金を動かし、ドイツ語教師育成のための仕組み作りを進めている。たとえば、1926年8月9日大阪で開催された日本におけるドイツ語とドイツ語教師の会合では、ドイツ大使・ゾルフの臨時会議によって500円の寄付金がなされ、将来のドイツ語教師が使用する旅行手当基金の基礎を作る取組みなどを始めていた（表1-⑩）。

ユーバーシャル旧蔵写真（写真4）にはゾルフ大使、朝日新聞社・社主の村山龍平、佐多愛彦、ユーバーシャル、北里蘭らが写る写真がある。1920年代後半のものであろう。1927年、佐多は日独文化親善のため欧米旅行に出る。それには、ユーバーシャルも同行した。5月20日大阪出発、シベリア経由でドイツを始めヨーロッパを回り、イギリスから船でニューヨークに渡り、米国各地を回り、サンフランシスコから船で太平洋を横断、12月9日横浜帰着という7カ月近くに及ぶ長期旅行だった⁶⁸⁾。他方、これに先立ち、ユーバーシャルは台湾原住民のムラ・ボガリへの旅を果たしている。その数年前には、スندا諸島（現イ



写真4 ゾルフ大使とともに (No. 85)

中央手前にゾルフ大使、左後ろの和服姿が朝日新聞社創業者・村山龍平，その左隣に佐多愛彦，左端にユーバーシャルが写る。ゾルフ大使の手前右隣が北里闌，右端は佐多の息子佐多直康とみられる。年代は1927～1928年頃か

ンドネシア)にも旅していた。日本人の国民性や日独関係に関する研究の一方、日本文化を南方アジアの中で位置づける文化史研究に向かっていたのである。

4. 台湾原住民・ボガリ社への旅

「Bongali」は、自らカメラをもって台湾山中を歩き、原住民・パイワン(排湾族)が住むボガリ社(ボンガリ, Vungalid)を採訪記録した、ユーバーシャルの業績中最もフィールドの息使いが伝わる論考である(表1-⑩)。そこには自身の戦争体験や日本語学習経験、日本の歴史や文化史的関心、さらに数年前に訪れていたスンダ諸島⁶⁹⁾での印象が重ね合わされ、言語・首狩り・入れ墨・禪の習俗などを通して文化の系譜を見出そうと格闘していた。当時最新の論考だったヴィートフェルト(Wiedfeldt)のアタヤルに関する論、森丑之助の台湾原住民研究、人類学者・伊能嘉矩やフローレンツによる首狩りの歌の採集記録、北里闌の日本語形成論などがユーバーシャルの関心を支えていた。

旅の記録は、1927年3月14日、ナガサワ氏同行の台北(図1)から始まる。ナガサワとは台湾総督府警務局長モトヤマの秘書とあるので警務局庶務係の長澤真策であろうか、モトヤマとは当時台湾総督府の警務局長だった本山文平のことである。本山は元台湾総督府民政長官で当時は大阪朝日新聞社にいたシモムラが推薦した人物とあるので、シモムラとは下村宏のことである。民政長官時代の下村は、作家の佐藤春夫が1920年の夏3カ月以上に及び台湾を旅し、原住民のムラなどを訪れた時にも森丑之助の依頼をうけて、種々の便宜を図っていた⁷⁰⁾。おかげで、春夫の台湾旅行は実り多いものになった。下村は、文人の旅を後押しし、台湾をよく書いてもらうことがひいては台湾観光を活性化し、「南方の一勢力となる」日が訪れることを期待していた⁷¹⁾。ユーバーシャルの台湾訪問時、下村はすでに長官の職を離れていたが、後輩の本山を推薦し、官僚組織の人脈を使って後方から便宜を図ったのであろう。下村は、後に国務大臣として終戦処理にあたり、戦後拓殖大学総長などを務めた。平生夙三郎とは知己があり、平生が1925年外遊から帰国後、実業の世界を

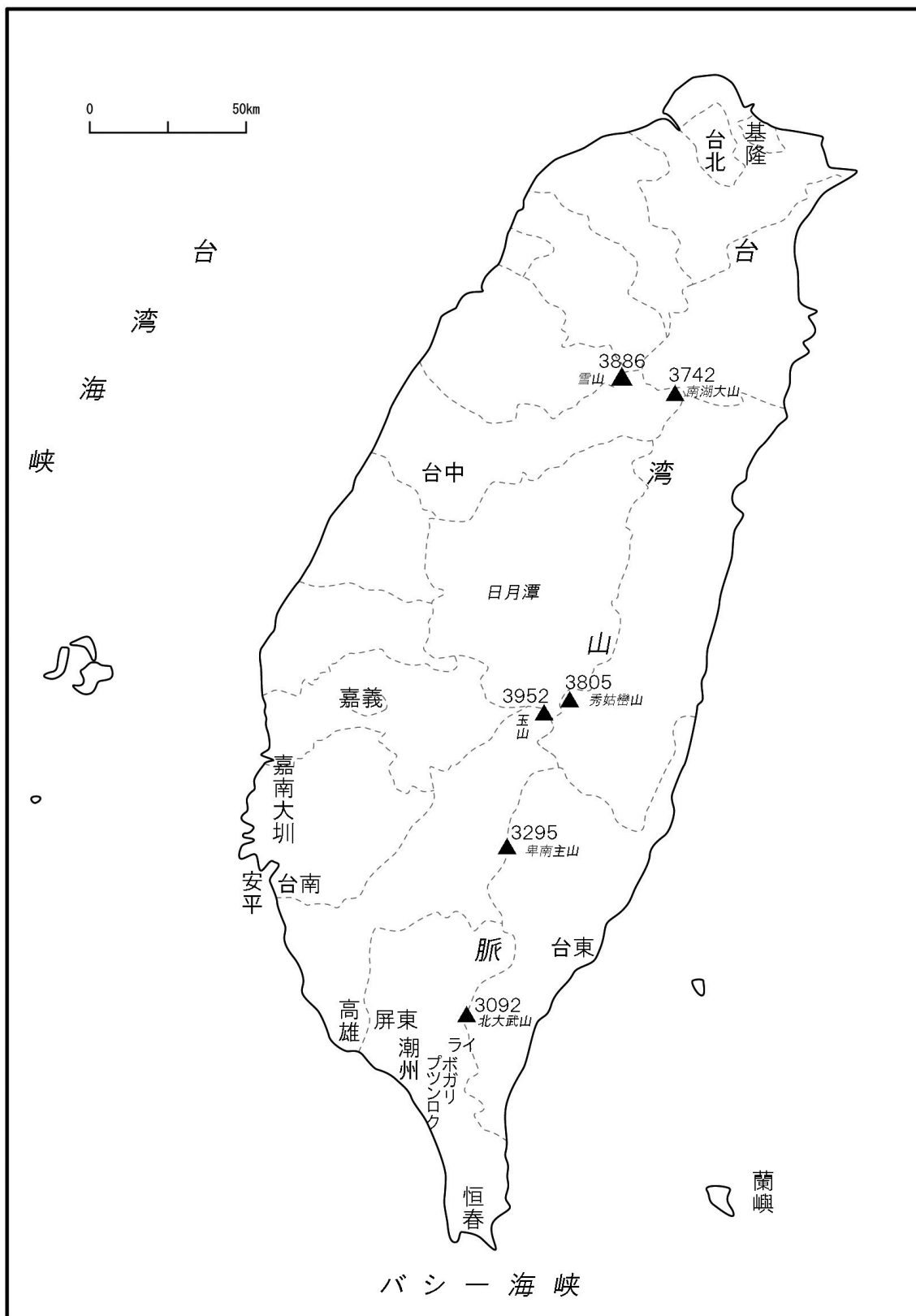


図1 台湾関連地名

辞めた時、その晩餐会に協賛するなどしている。

ユーバーシャルの旅程は、台北を晩に発ち(列車泊)、翌朝にドイツの窒素製品の製造工場がある高雄港へ、午前中に屏東の製糖工場を訪ねている。そこで

は、S.クサカドの案内をうけた。S.クサカドとは、台湾製糖株式会社の技術者・草鹿砥祐吉ゆうきちのことであろう。当時台湾は、稲作と製糖用のサトウキビ(甘蔗)栽培を奨励しており、その生産拡大に化学肥料が不可

表4 「ボガリ」掲載の写真（撮影とキャプション：ユーバーシャル，補足：筆者）

① ボガリ社への私の荷物運搬者 補足：荷物を運搬してくれたボガリの青年，前髪を額で切り揃え， ^{くわ} 銜え煙草，頭に花飾り
② 中国服を着た少女とパイワン族の少年たち 補足：パイワンの少年たちは，肩から斜めに色柄の布をまとう
③ ツオ族の青年 補足：頭に帽子をかぶり，髪を出さず，短い法被様の上着を腰で縛り，前はエプロン状，山刀をさす
④ ボガリの青年と木村巡査 補足：青年は前髪を額の上で切り揃え，頭に花飾り，首飾り，色柄の長めのローブを肩からかけ，裸足。37歳の木村巡査は制帽，サーベル，地下足袋。交番前で撮影で，背後に赤子を負ぶった女性と5歳の息子の腕が写る。巡査の家族とみられる
⑤ 台湾人と「押し車」 補足：レールの上を手押しで移動する台車が高地での移動に活躍した。同様の台車が北里蘭の角板山調査でも登場している
⑥ ボガリ社の交番 補足：5歳の息子と一緒に，④と同じ制帽・サーベル姿の木村巡査が入口に立つ
⑦ パイワン族の家 補足：石板でできた長い家で，道にも薄い石板が敷き詰められている

欠だった。需要の高い窒素肥料の一つである硫酸は、1920年代はドイツ産で需要が満たされており⁷²⁾、高雄にその肥料工場があった。つまりユーバーシャルの台湾訪問は、台湾総督府のお膳立てのもと、日独経済情勢を実地に見定める視察の役割も担っていた。

視察後、同行のメンバーと別れたユーバーシャルは潮州へ汽車で出て、約25km先のボガリを徒歩でめざす。台湾は、3000m級の山々が連なる台湾山脈が脊梁となり、パイワン族の住むボガリも標高600～700mの高地に位置する。山地への調査は警察署への届出だけでなく、警官の同行をえて進める必要がある。原住民のムラ入りを希望するユーバーシャルに、総督府が選んだのがボガリ社であった。ボガリは1900年(明治33)、台湾原住民研究者・森丑之助の案内で、人類・考古学の鳥居龍蔵がすでに訪れていた場所である⁷³⁾。鳥居と森はその時首狩りの習俗を直接確認し、ボガリ社の頭骨架を写真に収めていた⁷⁴⁾。ユーバーシャルはそれを見たはずである。ユーバーシャルは、食料調達に潮州にやってきたパイワンの青年に荷物の運搬を依頼し、護衛の日本人と3民族で目的地をめざした。途中、護衛の警官は、友人から譲り受けたおよそ10kgの未加工の鯨肉を自転車の荷台にのせ、同行した。当時台湾は南湾の屏東恒春鎮(懇丁)が統治下唯一の捕鯨基地だった。鯨肉はそこに水揚げされた一部だったと推察する。潮州から川沿いの山道を東へ向かい、一旦はライ社(内社)をめざしたが、遠回りになるため引き返し、鯨肉は原住民の杖の先に括りつけられ、ライへ、ユーバーシャルらは、プツンロク(Putschinroku, Pucunug, 文楽)に向け南へ進

路を変え、ボガリ社をめざした。護衛は次の管轄の警官に引き継がれ、ボガリ社に在駐1年の木村巡査が呼ばれ、彼の案内で移動した。ユーバーシャルは旅の途中、荷物を運んでくれた同行の若者からパイワン語を学び、日本語の「R」とパイワン語の「L」の音の違いを聞き分けた。ユーバーシャルは休憩時を利用してフィルムカメラで撮影もした。ボガリの論にはユーバーシャル撮影の7枚の写真(表4、写真5)が掲載されている。写真はいずれも9.9cm×6.9cmの縦位置である。写真家の出口正登によると、カメラはレンズ3枚構成のスプリングカメラ、レンズは画角45度の標準レンズF 75mm前後を使用した可能性が高いという。つまりユーバーシャルは、調査旅行に適したカメラとして当時まだ新しかった、レンズを折り畳んでボディに収納できるフィルム式小型カメラを持参し、現地に赴いたとみられるのである。

ユーバーシャルは木村巡査から婚姻など原住民の慣習と現代生活について聞き取った。さらに、南太平洋や日本にもみられる男性の禪の形状について同行の原住民から注意深く観察した。日本人はどこからきたのか、どのように混血をなしたのか、言語はどうか、フローレンスが訳した古事記や日本紀にみる日本神話と南海島民の神話との比較、スンダ諸島、台湾、日本につながる家屋の類似性、日本人の偏差の大きい形質的特徴、古代日本語と琉球言語に関する北里の研究結果、黒潮に乗ってどんな人たちが、どんな文化をもって到来したのか、そのことを考えながらユーバーシャルは山道を歩く。すると、急に広がった道の登坂に突如出現したのは、石板でできた祭壇上に白く風



写真5 台湾ボガリ社にて(1927年3月ユーバーシャル撮影)

出典：表1-①掲載写真(表4-④) 木村巡查(左)とボガリの青年，青年の右背後には，木村巡查の家族であろう，赤子を背負った女性と5歳の息子の腕が写る

化した頭蓋骨であった。馘首の風俗をこの目で見たユーバーシャルは、フローレンツの「台湾民謡」⁷⁵⁾にふれながら、さらにその文化史的意味を考察しようとする。フローレンツは、1897年人類学者の伊能嘉矩が台湾北部の竹頭角社の17歳の若者から収集した首狩りの歌⁷⁶⁾をこの論に引用していた。ユーバーシャルは、そこにかつて見た、あるいは学んだ景色を重ねあわせていく。先の大戦で青島に出征した時、私は多くの日本人将校が刀を身に着けているのを見た。日本の武士の歴史にはたす敵の首の意味とは何か？ 秀吉の朝鮮出兵と京都の「耳塚」の民俗の関係は？ 繰り返す日本の時代劇に現れる最期の形、西郷隆盛最期の首がいかに敵軍に扱われたか？ そして私は見た、山中で出会った花輪飾りをつけた台湾原住民の若者もまた刀を隠し持っているのを・・・時代も場所もばらばらに見えるそれらの文化的連関を、ユーバーシャルは歩きながら繋がりあるものとして想起していた。

夕方ブツンロクに到着。そこで、巡查とユーバーシャルは、原住民から粟酒のもてなしを受ける。2

つのつながった杯をもつ木製道具で、2人同時にペースをあわせて酒を飲む連杯の慣わしを体験し、その心のこもった親愛の習俗に満ち足りた心でブツンロクを出発する。そして暗闇の山中をさらにボガリへ向けて歩く。するともう一つの頭骨架に出会った。その夜はボガリの巡查の家に泊った。それにしても長い1日、驚きの健脚である。翌朝は5時に起き、正確で鮮明な写真を撮るための準備を注意深く行う。朝ムラへいくと、そこにはブツンロクとよく似た風景が広がっていた。石板でできた壁、未知の想像上の動物ではなく、蛇や人間の顔の彫刻、目模様。入墨はどうか？ ライ・ブツンロク・ボガリの男性はすでに入墨をしていなかった。近代には禁止されるようになった入墨が台湾から日本、アイヌへと繋がってみられる文化史意味にユーバーシャルは関心をもっていた。

続いてユーバーシャルは原住民の社会を考える。ビュヒャー(Bücher)の『労働とリズム』を参照しつつ⁷⁷⁾、ここではヴィートフェルトの論文「台湾アタヤル族の経済、法および社会に関する基本的諸事実と根本的諸形態」(1914)と、「アタヤル文化の停滞の諸原因を探る」(1917)が用いられる。この2つの論考は西欧では知られていたが、日本では顧みられず、90年近くたった2003年、金子・山田両氏によってようやく翻訳されたものである⁷⁸⁾。「所有・婚姻・貨幣」という3つの制度が人間の基本的な制度としてあり、社会と国家の恣意を越え、文化の根本をなすとするデュリング(Dühring)の『武器・資本・労働』(1906年)の説を用い、それが台湾のアタヤル(タイヤル、泰雅など)にもあてはまることを示した論である。1913年日本政府の鉄道省顧問だったヴィートフェルトは、その年の春に5週間台湾に滞在し、この2つの論文を書きあげたという。注目すべきことに彼の在職時期に秘書として働いていたのは2章で登場したドクター・F.ハックであった⁷⁹⁾。ヴィートフェルトは1914年ドイツに戻ったが、ハックは青島戦に応召し、日本で長い俘虜生活を送った。ヴィートフェルトは、自らを学者先生ではなく、一介の行政官と表現するが、その論考では、アタヤルの文化が近い将来消失し、その担い手たちは生き残った後、異文化(日本文化)に吸収されることを予測していた。「ボガリ」は、ヴィートフェルトの予測から14年後、ユーバーシャル自身の目で確認する旅となった。「ボガリ」の結びは、森丑之助が取組んだ『台湾蕃族図譜』⁸⁰⁾に資料をえて、14万人に満たない台湾原住民の各部族の人口構成と、中国大陸からの370万人、18万人の日本人、その他3万人を超

す外国人を対比させ、原住民文化の将来を暗示するものとなっている。

北里蘭の台湾調査を追う

大阪医科大学の北里蘭が日本語研究のために台湾に向かったのは、1921年と22年である。初年度は私費で、翌年度は台湾総督府蕃務調査嘱託の名義で見残した東海岸を調査した⁸¹⁾。北里は、1921年パイワン族のいる南部潮州に1人で向かい、ライ社とブツンロク社の話者から男女の情歌や神子の口寄せのような呪文などを蠟管で録音している。その時の調査は、山を越え、谷を涉って行く道の不便と宿舎の便を欠くため、北里は「無論自分からその蕃社に赴く可き」⁸²⁾としつつも、警務課の好意によって潮州の公学校の一室でなされた。2社の蕃民諸氏は、生の芋を小刀に刺し、火に燻したものを一昼夜分の弁当として持参し協力してくれた。その成果をまとめあげ、出版の最中、1923年の関東大震災で印刷原稿は焼失した。その心労は大きかったが、北里は再び原稿をおこして1926年『日本古代語音韻組織考解説・表図』⁸³⁾を公刊する。さらに研究を深めるべく、1927年57歳の時に大阪医科大学を退職すると、5カ月のフィリピン調査に向かい、北里は、1930年『日本語の根本的研究』を集成した。北里の2回の台湾調査で、蠟管に収められた録音資料が日の目を見るのは70年後のことだった⁸⁴⁾。

つまりユーバーシャルのボガリ行きは、北里が果たせなかった「自から蕃社に赴く可き」を実行し、フィールド観察と聞き取りを軸に日本を照射するものだった。とくにユーバーシャルが赴いた時期は、原住民の習俗が消滅していく時期にあった。狩猟採集と焼畑による雑穀栽培の生活から水牛を使った水田稲作、道路建設による賃金労働へと変化する様を目に焼き付けている。台湾原住民の集落移転は、第二次世界大戦前から各地で進められていたが、ユーバーシャルが訪れたブツンロクとボガリは1950年10月廃村となり、ブツンロクは麓の文楽へ、ボガリは望嘉へと集団移転した⁸⁵⁾。森や鳥居、ユーバーシャルが見た首狩りの頭骨架は記憶と記録の中でのみ生き続けることになったのである。

北里のチヌリクラン乗船顛末 臨時台湾旧慣調査会編の『台湾蕃族図譜』1巻2巻(1915)の執筆刊行に携わった森丑之助は、1917年『台湾蕃族志』1巻タイヤル族を出した⁸⁶⁾。しかし、森は予定していた2巻以降を出すことはなかった。東京においていた資料や未刊の原稿が、1923年の関東大震災で焼失してし

まったのである。震災はここにも打撃を与えていた。森は1926年7月日本行き笠戸丸から消息をたった。ユーバーシャルと森の対面はかなわなかったが、森は震災前年の1922年、北里蘭の蘭嶼(紅頭嶼)調査に同行していた。北里は、「台湾で調査するなら、台北博物館の森氏に問え」と台湾航路の船中で凶らずも知合いになった岡本万太郎から助言され、目的に沿うプログラムを森に作ってもらった⁸⁷⁾。これまで十分でなかった撮影を補うための特派は、森にとっても願ったりで、ここに共同調査が実現する⁸⁸⁾。北里は1930年の『日本語の根本的研究』で、森が撮影した『台湾蕃族図譜』の写真数点を「原図 台湾蕃族図譜」として使用している。同書には「生?死?／激浪に弄ばるゝ刳舟」と題して刳り板船・チヌリクランでヤミ族が出漁する風景写真なども挿入されている。北里は、森を「蕃通の第一人者」と高く評価し、森の文の一節を記念のため転載し⁸⁹⁾、哀悼と敬意を形にした。そこには蘭嶼帰還のおり遭遇したある出来事が関与していた。

日本と周辺アジアの木造船文化の研究で筆者が蘭嶼を訪れたのは1991年9月、北里から69年後のことである。三重県鳥羽市にある海の博物館(現在鳥羽市立)でヤミ族(タオ)のタタラを1艘新館展示するため船を調達し、船造りを記録することが旅の目的だった。タタラはヤミ伝統の小型船で、反りがあがった船首尾、細かな彫刻と赤・白・黒の色彩がチヌリクラン同様美しい。祭礼やトビウオの共同漁に用いる大型のチヌリクランは当時建造していなかったが、小型のタタラは村々で手造りしていた。船外機はつけず、オールだけで操船し(写真6)⁹⁰⁾、一度乗せてもらったこともある。蘭嶼と台湾本島の間にはバシー海峡から分流する流れの速い潮流がある。行きは飛行機だったが、帰りに利用した台東富岡港に渡る定期船は当時も週2便だった。船は大揺れ、潮の強さをその時身をもって経験した。

北里の体験は、離れ小島の「連絡船は命綱」を一層実感させるものだった。定期船はやってきても、天候不良のため寄港せずに帰る場合も少なくない。近づいた汽船は何を思ったか、北里らの乗船を待たずに出航しようとする。大声で手を振り、しばらくして船は停止したが、大型船と岸壁の間を悪天候の中、渡してくれる船はなく、警官の命令で島民がようやく船を出した。紅頭嶼の船は刳船といっても、台湾中部の日月潭のようないわゆる独木船ではない。幾枚かの板を組み合わせて造るため、継ぎ目から海水が浸入する。波が高く、ブリッジには近づけない。もし船をうちつけた



写真6 台湾ヤミ族の二人乗りタタラ

1991年9月撮影 漁から帰った若いお父さんのもとへ、子供と妻が出迎える。今日は二人で漁に出た。魚は仲間と分配し、すべて自家消費にまわされる。自分は島の暮らしが好きだという。この船は、60代の父と一緒に造った。山から木の伐り出しなど重労働は自分がひきうけた。前後に高くそりあがった船の造り方や、文様など技はいずれも父から息子へ引き継がれる

ら、怪我人を出すか、刳船がこわれるかである。蕃人にとっては船のほうが、自分たちの命よりはるかに大事である。船首を蹴ってブリッジに飛んだ森は、波浪に飲み込まれた。北里は生きた心地がしなかった。しばらくして海面に森は浮かびあがったが、怒涛が再び彼を奪った。島に帰って弔わなければならないと北里は決心したが、森は溺れてはいなかった。蕃人の一人が海に飛び込み、背後から浮かびあがった森を支えてくれたからである。ブリッジに飛び移り、船員が抱きかかえるようにして船中に森を連れ去った。もしこの時落ちていたのが自分であったら、溺死していたであろう、自分の死は仕方がないとして、研究はどうなるか、四面楚歌の中、日本語起源の研究に没頭してきた北里は、万難を排して書かねばならないと、この時大決心した。関東大震災で焼失した印刷原稿を再び書き直す気力を引き出したのもこの決心が根底にあったからである。日本語研究の専門書に不釣り合いなほど克明なこの乗船記録は、図らずもヤミ族の船を伝える迫真のフィールド記録となっていた。

北里は、同書の中で、ヤミ族の男性の褌と女性の腰巻が日本人とまったく共通し、褌の風習はボルネオのダヤク族にもあり、台湾の生蕃と一致することを指摘

している⁹¹⁾。当時、褌は南方文化の指標の一つと目されていた物質文化であった。

第二次世界大戦の戦前・戦中に文化史的民族学のシュミット (Schmidt) のもとでウーン大学に学び、同大学客員教授でもあった民族学者の岡正雄は、戦後になって日本民族文化の形成論を日本で発表する⁹²⁾。東・東南アジアを視野にいたれたその研究は、日本民族文化の源流に関する学説として高く評価され、その後の学際研究に影響をあたえた。その基になるのは1933年にウーン大学に提出された学位論文『古日本の文化層』であり、発表はドイツ語だった。岡は当時の日本の社会情勢では、到底受入れられない研究成果と認識し、ドイツ語で発表したと述懐するように、日本語や日本人の起源に関わる文化史的な日本学研究は大正・昭和の初期に芽生えながら、容易には開花しにくい問題意識だった。

平生夙三郎の台湾訪問と日本人論

興味深いことに、ユーバーシャールの渡台1年前、平生夙三郎はロータリークラブの活動普及を兼ねて、宝塚歌劇や私鉄経営で知られる小林一三父子を含む10人の面々と1926年8月4-19日まで16日間の台湾観光

を率いている⁹³⁾。正午神戸出発、翌朝5時門司着、昼出航、船中2泊で7日午後3時基隆着と3泊4日で到着した。1919年の『航路案内』では⁹⁴⁾、神戸を正午出発、翌午前8時門司港着、午後4時門司港を出て3昼夜、5日目の午前6時基隆着と5日かかっていることから、この間に15時間もの時間短縮が図られていた。さらに船内では連日淡水の浴湯が給されていることに、平生は驚いている。

台湾での訪問先は、台北の台湾神社、高雄から屏東の製糖工場、台南神社と孔子廟、安平、嘉南大圳大灌漑工事、嘉義農事試験所、南投の日月潭、台中水源地、台北の樟脳工場、商品陳列館、植物園、博物館、観音寺院、茶工場などであった。随所に官尊民卑の弊があり、合理性に欠ける開発の実情を目の当たりにした一行は、ゆく先々で待ち受ける接待を極力固辞しながら、ロータリークラブの精神で、進んで講演会を開き、視察の忌憚のない意見を披露して現地関係者と交流を図った。たとえば、南西部・台南の安平は、台南の外港として繁栄をみたまもの、港湾機能が失われたのは自然の土砂堆積の激しさからだった。そうした場所への築港の愚策、当分ジャンク船や竹筏の運搬に供せられるとしても結局閉塞し、養魚池になる時期がくるとの予測、屏東から東海岸にいたる交通は鉄道より道路を優先すべし、日月潭のダム工事は後にし、火力発電を高雄に設立して電力供給にあたるべし、などである。

宿泊した日月潭では100名ほどの原住民のムラがあり、彼等が奏でる音楽に小林一三は深く感銘する。他方、「眼ヲ下セバ日月潭ノ湖ハ漣満チ、蕃人ガ独木舟ヲ操リテ湖畔ヲ渡ルヲ見ル」と平生は観察していた。日月潭は、台湾原住民・サオ族の単材丸木舟が長く残った地だった。平生はその後台北で見学した博物館にあった、熊襲薩摩隼人の祖先はツォー族、大和民族の祖先は現在南部にいるタイヤル族だとする説明に関心を示している。はたしてそうかどうかは知らないが、「日本人ガ馬來人種ニシテ黒潮ニ依リテ來着セルモノナルコトハ余ノ確信スルトナリ。果シテ我祖先ガ台湾ニ常住シ夫ヨリ北上セシモノカ、南洋ヨリ直チニ日本ニ來着セシヤハ不明ナルガ如シ」と1926年8月14日の日記に綴っている⁹⁵⁾。このように記す程、平生は日本人の形成に関心をもち、南方要素があることを「確信」していたのである。

平生夙三郎が「日本主義」という言葉を使い始めたのは、大正9年(1920)頃からであるという。いわゆる皇室中心主義の別名であるかに思われるが、当時世間の神道学者がさかんに唱えだしていた日本主義その

ままではなく、夙三郎流儀で使ったのかもしれない、と河合は指摘する⁹⁶⁾。平生が皇国史観を重視するにせよ、天皇制への理解は、他を排除し、他と交わることのない純血性を重んじていたわけではない点に平生の流儀があり、その見方は日系移民にたいする考え方にも反映していたように思われる。つまり、天皇を精神的支柱としつつ、幾多の移民としてやってきた人々が一つになることを理想としていたふしがある。平生は、日本主義とも、大和魂とも、日本国民ともいうが、いわゆる民族主義ではなく、日本民族という表現はこの頃、ほとんど使っていなかった。1926年11月26日の日記には、ロータリー午餐会で大三島神社の宮司が日本民族の祖先ははるかバビロンに居をもつスメル族であるとの自説を滔々と説くのを聞き、本人を前に露骨に疑問を述べながらも、捨象せず、「コノ説ハ余ガ初メテ耳ニシタルトコロナリ」と日記に留めおいていた⁹⁷⁾。

5. ライプツィヒ大学へ

1931年5月16日、日本ゲート協会の発会式が京都都ホテルで挙行された。まず雪山俊夫が協会設立の報告をし、ユーバーシャルによるゲート精神の日本的解釈の講演、マイエンブルクの講演が続いた⁹⁸⁾。この数年前より日独文化交流の一貫で、学生の交換は進められていた。新たに日本学生会館と日本講座を開設する議が立ち上がり、日本側では2万5千円の資金が集まった。東洋窒素工業会社の奥村政雄、牧田環両氏の肝入でその調達がなされ、1931年10月23日の東京朝日新聞記事によれば、同日フォレッチ駐日大使に手交することになった。ドイツ側でも相当の寄附があり、具体的な計画が近く出されるという。ここに名前のあがる東洋窒素工業株式会社は、ハーバー・ボッシュ法というドイツで開発された合成硫酸製造法を第一次世界大戦勃発後の1917年に日本が没収したことと関わる。国内の工業化を図り、国際競争力を高めるねらいで、この製造法を1921年、東洋窒素組合を結成した7つの会社・グループに払い下げた。同組合は1926年法人化し、株式会社になった。技術的低位にあった日本が、当時ドイツに依存することなく硫酸製造を開始する見込みがないまま、あえて法人化に踏み切ったのは、同社がドイツの合成硫酸の輸入商社の指名権をもち、市場への流入量をコントロールし、価格低下を押し留める機能をはたしていたことが大きいといわれる⁹⁹⁾。つまり、ハーバー・ボッシュ法による製品の流入に対しては、特許法を楯にロイヤルティを徴収することがで

きた同社は、ドイツでの日本学科創設にかかる教育支援へ寄付金を拠出していた。なお工業化に成功していた日本窒素には、習志野収容所にいたE・スクリバ(Scriba)¹⁰⁰が第一次大戦後働いていた。

学生の交換留学は、1930年ライプツィヒ大学の申し出で京都大学より4名、ライプツィヒ大学から3名の派遣が実現していた¹⁰¹。ライプツィヒ大学の日本学科創設を可能にした背景には、日独双方の資金調達を含むユーバーシャールの幅広い人脈があったとみられる。大阪毎日新聞1932年1月4日では、「ライプツィヒ大学に日本語学科 本社より寄附の二万五千円で新設 同時に出来る『本山教室』と見出しがあり、日本語学科創設の経緯が示される。先年ケルン大学に日本研究の科を創設する費用として金1万円を寄付したが、都合によりその運びとならず、ライプツィヒ大学で同様の計画をみるに至ったので、両大学交渉の末、そのお金をライプツィヒ大学に移し、新たに本社より1万5千円を寄付し、日本語学科の一講座を開設することになった。同時に学内に「本山教室」の一室を特設し、日本に関する諸種の研究資料を蒐集するはずで、講師は20年にわたり大阪医科大学で、最近では京都帝国大学の講師としても教鞭をとり、日本での豊富な教育経験をもつユーバーシャールがあたり、3月頃出発赴任の予定、としている。他方、1940年の佐多の伝記には、佐多が「今より十餘年前」、当時の大阪毎日新聞社長本山彦一を動かし、金「拾万円」をライプツィヒ大学に寄贈させ、同大学の日本学教室の創立に貢献し、その開設とともに多年大阪医科大学でドイツ語を講じてきたユーバーシャール博士を推薦し、その教授にした、とある¹⁰²。時期、寄付金の額、回数等についてはなお検討を要するが、かつてユーバーシャールを日本に迎えた佐多が中心となって、ドイツにおける日本学科、日本学研究所開設の計画はかなり以前から構想されていた。寄付者は、本山のみならず、東洋窒素や佐多自らなどにおよび、日本学科はようやく軌道にのり、翌32年4月ユーバーシャールは母校のライプツィヒ大学の教壇に立った。

在職中、ユーバーシャールが取組んだ研究は、芭蕉の『奥の細道』の独語訳、近現代のドイツと日本の文化的関係の論考、1940年の東京オリンピック開催を見据え編纂された『日本と第12回オリンピックゲーム』における「日本人の精神性」に関する論考だった[表1-⑮⑯⑰]。

1936年8月28日の東京朝日新聞には、ライプツィヒ大学、ミュンヘン・ベルリン・ボン大学などで日本学

講座が始まることを、さらに1937年4月15日の東京朝日新聞にも3年後の東京オリンピックに備え、日本への認識を高めるためライプツィヒ大学で日本講座が開設されたことを報じている。おりしも1936年3月25日～1937年2月11日当時、平生鈺三郎は文部大臣としてオリンピック開催に向けて、国民向けラジオ演説(1936年9月3日)、嘉納治五郎との面談[読売新聞1936年11月14日]、組織委員会の設置運営など様々な公的活動を展開していた。しかし、平生の文部大臣としての仕事は、広田弘毅内閣の総辞職により1年足らずで終わり、東京オリンピックも戦争に阻まれ開催されることはなかった。

1932年から1937年のユーバーシャールのライプツィヒ大学での在職について、甲南大学文学部の追悼号には、「ライプツィヒ大学日本語学教授になり、日本文化研究所を設立、初代所長となる」¹⁰³とある。自らが1950年に発表した論文「ドイツ人医師フリッツ・ヘルテルの日本での足跡」にも「früher Professor für Japanisch an der Universität Leipzig」[表1⑱:99]、すなわち「元ライプツィヒ大学日本学教授」とある。一方、ライプツィヒ大学の教授カタログには、1932-1937 planmäßiger außerordentlicher Professor für Japanologie an der Philologisch-Historischen Abteilung der Philosophischen Fakultät der Universität Leipzig、「ライプツィヒ大学哲学部言語・歴史学科日本学の予定准教授」とあり、日本での記載と若干齟齬がある。

彼がわずか5年で日本に戻るようになったのは、ヴォルム、黒崎、岩本、井上、ローなど国内外の研究者が言及するところによると¹⁰⁴、ナチス時代に強化された同性愛を犯罪とする刑法175条容疑で有罪になる恐れがあったためとされる。甲南高校でのユーバーシャールの教え子であり、手紙と日記を用いた『学童疎開』の著書をもつ岩崎哲は、「この名目上の嫌疑もデッチアゲだろう」と指摘する¹⁰⁵。アメリカのローは、1919年から1936年の独・日関係のイデオロギーと文化を論じた著書(2019)の中で、ドイツ側の資料を中心に彼のライプツィヒ大学での追放の経緯に詳しくふれ、その嫌疑は証明できるものではないこと、ユーバーシャールが無から日本学の学科を立上げ、多くの日本の資本家や学者を吸引して寄附を募り、なした功績に照らせば、彼が国外に逃れ、大学を追われた事態は、ドイツにおける日本学の推進を大きく遅らせることになったと指摘した。刑法175条への告発と嫌疑のかけ方は、ハックの場合と共通していた。日独合作映画「サムライの娘」のプレミアム映画試写会が終わる頃

より不穏な情勢になり、ハックは同容疑で逮捕された。1937年7月始めの頃だったという¹⁰⁶⁾。その後、ハックはスイスに亡命し、生涯を終えた。日本に逃れたユーバーシャルは甲南学園に教育の場をえて、生涯ドイツに戻ることはなかった。

6. 甲南学園での教育

教え子が知るユーバーシャルは、習志野の出来事を学生に語ることをしなかったという。学生たちもあえて聞くことはしなかった。彼が旧制甲南高校でドイツ語を教えることになったのは1924年9月、平生鈺三郎はアメリカ、ブラジル、ヨーロッパと世界漫遊の半年の長旅に出た時期であり、不在中の着任だった。平生は、長旅の好読書に小林一郎の『芭蕉翁の一生』を持参し、就寝に際して芭蕉の句を読み返しては「実ニ読メドモ倦マザル明文ナリ」とその感動を日記に留めている [1924年9月14日]¹⁰⁷⁾。

学園史をひもとくと、「ユーバーシャル」の名は『甲南学園50年史図録』に旧制・新制高校の講師・新制大学教授として登場する。また、『甲南学園の50年』には老齢に達した講義中の写真が載る¹⁰⁸⁾。ユーバーシャルが着任する前年の1923年は大阪医科大学教授であった伊藤兼一が着任し、小森校長の体調不良を補って早々に教務主任を務め、高等科2年を設けるために必要な教員備聘の衝にあたっていたと平生日記には綴られる [1924年6月13日]¹⁰⁹⁾。東京帝国大学哲学科を1901年(明治34)に卒業した伊藤は、「短い期間ながら」、学生からは「海坊主」のあだ名を頂戴し、愉快な先生だったと記憶されている。「理科には理科のドイツ語がある。私は諸君が3年を終える頃までには、どんなドイツ語の専門書でも読めるようにしてやる」と宣言し、後に学長となった市川衛はその思い出を講演に残した。伊藤は平生鈺三郎にも同様の宣言をし、そのように自信をもった人だから甲南高校の教授に適任ではないか、と平生は綴っている [1923年2月18日]¹¹⁰⁾。またユーバーシャルと同じ1924年9月に倫理学の教授として着任したのは、東京帝国大学卒業後、ドイツへの留学経験のある哲学者・藤岡蔵六であった。帰国後、藤岡の授業を見学した平生は、1925年9月22日の日記にその内容にふれ、「藤岡ノ修身ニ至リテハ余ガ尤モ快心ノ感アリシモノナリ」と綴っている¹¹¹⁾。その後、病に倒れた藤岡を平生は「特別配慮で」¹¹²⁾ 1931年3月まで厚遇したという¹¹³⁾。当時大阪医科大学との兼任講師であったユーバーシャルのこと

はこの時期の平生日記に現れてこないが、ユーバーシャルは旧制・新制高校・新制大学にまたがり学園の教育に長く携わった数少ない教師であった。

新制甲南高校でユーバーシャルからドイツ語を学んだ岩本哲は、日独交換留学生としてドイツに留学していた1962年、マールブルク市の聖エリザベス教会の前庭でおにぎりを食べていたところ、「習志野の俘虜収容所にいた」という初老のドイツ人に「メシメシオイシイデスカ」と声をかけられた。「僕の先生も俘虜収容所におられた」というと「憶えている、今度帰ったら、僕の話をしてくれ。僕は〇〇〇〇という」といって別れたという。岩本は、文中でその人物の名を明かしていないが、半年後に、神戸でユーバーシャル先生に会って、この話をすると、「感慨深げであった」という¹¹⁴⁾。

新制甲南高校と甲南大学でのユーバーシャルの教え子であった黒崎勇は、甲南大学文学部のドイツ語学科創設に関わり、学科廃止後は国際言語文化センター所長を務められた。ユーバーシャルと長年にわたり間近に接した黒崎は、「戦後の先生の気持ちは実に複雑であったと想像されるが、先生はあくまで自分で正しいと思われる道をすすまれた」¹¹⁵⁾と述べる。その先生がただ一度だけ、ご自分の人生の過ちを暗にほめかされたことがあったという。高校最後の授業の時、高校を卒業し、大学に進学しても、またその後社会人になっても「決して手を汚さないように」といわれ、少し涙ぐまれた様子であった。この先生のはなむけの言葉の意味を当時にわかに理解できなかったが、後に個人的な対話において、ライプツィヒ大学で日本学研究所を作られ初代所長になられた時にナチを利用し、ナチの活動に加担されたことが、後にご自分の手を汚されたことと認識するに至ったことを述懐されたという。黒崎は定年最後の論考でそれを伝えた。

ユーバーシャルの教育研究の軌跡を辿れば、いずれは祖国に帰り、ドイツでの日本学をうちたてるべく精力を傾けていた姿が浮き彫りになる。天皇制や憲法にかかわる研究も、芭蕉研究も、日本人の国民性や精神性に関わる研究も、台湾原住民ボガリの訪問も人文・社会科学にまたがるドイツの文化史学派を継承する日本学の部分を構成していた。しかし、念願叶い、一度は「ライプツィヒ大学日本学教授」としての立場をえた彼が、1937年日本へ戻った後は、それまでの日本学を完全に封印したかに思われる。戦後に公刊された論文は、若き医科大学時代に出会い、交流を図ったヘルテルや荒木寅三郎や有馬頼吉に関する追憶であり、

追悼号に掲載された論文も、ライプツィヒ大学在職時に著した芭蕉研究の本論の再録であった〔表1-⑱⑲⑳〕。1950年に刊行された『ヘルテル先生追想録』は、ヘルテルが1940年に逝去した直後に、ユーバーシャールを含む有志によって座談会を開催するなどし、すぐにも編纂の運びであった。しかし、敗戦の苦悩をはさみ、10年の歳月をへて希望が「強く燃え」、ようやく出版にこぎつけることができた。その200部は、ユーバーシャールの尽力でドイツの大学やヘルテルと懇意だった外科教授に贈られたという。

教え子の中のユーバー先生 ユーバーシャールは、甲南学園を最後の教育の場として生き終えた。教え子の中のユーバー先生は、どんな先生だったのか？紙面も尽きたので、本稿では冒頭でふれたお話の続きを一つだけ紹介し、次稿につなげよう。

「ユーバー先生のことをお聞きしたい」と東海甲南会でお目にかかった原靖氏に連絡すると、開口一番「ユーバーではありません、ユーバーシャール、Überschaar, ウムラウトがつく」と語られた。「これが日本人には発音できない。それでしょっちゅう怒られていました」。東京青山に生まれた原さんは、父の仕事の関係で学校をあちこち転校した。尼崎に移ることになり、どこの高校がいいか、親父がいろいろ聞いてきてかつて天野貞祐校長のいた甲南に入ることになった。大半は中学からそのままあがるので、高校からの入学生は自分を含めて4、5人程だったという。原さんは1951年（昭和26）新制高校4期生として入学し、高校3年間ユーバー先生にドイツ語を習った。発音には厳しく、唇に指をもってきて息の吹き方と音を確認させた。「叱られるのはしょっちゅう、3年間文字で覚えるのではなく、先生の口の動きで覚えて、毎週同じ文章を発音しながら繰り返した。Was klappert 何の音がする？/in meinen Händen 私の手の中で/Es sind wie Sie sehen それは見ての通り/drei kleine Steine 3つの小さな石・・・最後3つの小さな石の r, l, s, そこらへんもポイントだった」という。先生は実際に手の中に3つの石を入れ、握って前半は振って、後半は手を開いて3つの石を皆に見せ、これを発音しながら、毎週繰り返された。

「とにかく授業のたびに同じことを。85歳だが、今でも忘れずに覚えています。ほんとに懐かしい」。「先生は背が高いので、黒板にむかう時など天井の照明にしょっちゅう頭をうつ。ごつんとね。ああ、また怒ります。大学は東京の早稲田大学へ出ました。そこでもドイツ語をとったが、アーベーツエーでしょ、眠く

なってね」。

高校でドイツ人の先生から本場のドイツ語を3年間みっちり習ったため、原さんにとって大学での初歩からの授業は退屈に感じられる程だった。2005年愛知万博（日本国際博覧会「愛・地球博」）が開かれた時、原さんは会場を結ぶゴンドラで出会ったドイツ人と話をしたことがある。ユーバー先生に習ったドイツ語は十分通用し、50年以上たっても先生の教育は生きていると実感したという。

ユーバー先生、こんにちは

ユーバーシャールは、2つの世界戦争を生きぬいた。「敗戦国日本において、外国人として又同じ敗戦国民としての御生活はお気の毒であった。特に体力の衰えが著しくなった晩年の孤独な御生活は痛ましかった」と教え子でドイツ語教授となった村尾喜夫は追悼論文集で述べている¹¹⁶⁾。「身寄りはない」〔朝日新聞記事1965年1月23日〕、「生涯独身」¹¹⁷⁾で過ごされ、「自分の愛情を殆ど教え子に注がれた」、遺族のおられないユーバーシャールは「相続財産はドイツ政府に収公された」¹¹⁸⁾。これらの記述からは、ユーバーシャールの家族・親族の存在は容易に浮かびあがってはこない。

しかし、彼の元に親戚らしい人物が現れたことを示す記録がある。1938年2月13日の新聞記事には「親日映画の撮影に」という見出しで若き映画人パウル・チャールスの来日がとりあげられ、「従兄に当る」ユーバーシャールのことにふれている（表2-⑦）。また同年8月12日の新聞には、来日半年余のチャールスが語る日本映画の印象評が載る（表2-⑧）。チャールスはウーファ社の助監督として『コスモポリス（*原題はGold）』と『白鳥の舞（*原題はSchwarz Roses）』に関わった人物とみられる¹¹⁹⁾。ユーバーシャールや佐多、佐多の教え子である有馬頼吉に日本芸術の鑑賞を教えられ、日本文化に愛着の念をもつに至ったと記事にはある。佐多の伝記にも、歌舞伎役者の雁治郎の楽屋へ佐多に伴われて訪ねるチャールスの写真が載っている¹²⁰⁾。またユーバーシャールの旧蔵写真には（写真7）、チャールス来日時の撮影現場とみられる、ユーバーシャールとチャールスが写る写真が2枚ある。どういう従兄関係かは不明だが、来日中ユーバーシャールが面倒を見ていた様子は写真からも十分伺える。

このほか旧蔵写真には、1935年の裏書がみられる老齢の女性の写真もある。習志野市教育委員会の松浦史浩氏が推定するように、おそらく母親と思われる。これら残された写真資料（とくに俘虜収容所以外の）や



写真7 撮影するパウル・チールス（左）と見守るユーバーシャル（右手前）（No. 86）

チールスの来日した1938年の春、ユーバーシャル53歳の頃、自宅からそう遠くない阪神間の街角と思われる

教え子たちの記憶等を通してユーバーシャルの足跡に近づく道はまだありそうだ。筆者の先祖の記憶についても新たに見えてきたことがある。稿を改めよう。

2020年9月、筆者は六甲山の山中・再度山修法ヶ原の神戸市立外国人墓地を訪れた。広大な敷地には約2700名の外国人が眠る。本墓地は1937年（昭和12）に着工されたが、阪神大水害や太平洋戦争で長らく整備が中断していた。戦後講和条約の締結記念事業として整備が再開され、1952年に小野原からの移転、1962年に春日野からの移転が完了し、外国人墓地は集約されたという¹²¹⁾。2007年には周辺の公園や永久植生保存地を含め、国の名勝に指定された。日々管理する担当者たちの並々ならぬ整備の努力が伺われる場所だ。

はじめてユーバーシャルの墓前を訪れた（写真8）。「ユーバー先生、こんにちわ」・・・、墓碑には生没に加え「^{はじめ} ^{ことは}太初に言あり」¹²²⁾と刻まれている。そこから坂を登った少し離れた場所には、板東収容所の俘虜だったハインリヒ・ファン・デア・ラーンが眠っていた¹²³⁾。同じく板東収容所で過ごし、後に大阪外国語大学の教授となったボーネル（Bohner）の墓はユーバーシャルと同じ並びにあった。哲学者でありドイツ語の教授であったR・シンチンガー（シンチンゲル、Schinzinger）の回想記によれば¹²⁴⁾、「上流階級の学友会所属学生」（Corps-Studenten）出身だったユーバー



写真8 ユーバーシャルの墓碑

神戸外国人墓地にて、2020年9月撮影 墓碑には1885年3月4日マイセンに生まれ、1965年1月21日神戸で没とある

シャルと「牧師館の子」で元神学者のボーネルは氣質も違い、ライバルとして緊張関係があったという。ボーネルは解放後いったん青島に戻って教会の運営に携わった後、1922年再来日し大阪外国語学校の講師となった。四国巡礼や三種の神器、武士道、世阿弥や民話研究など日本の民俗研究を手がけたが、第二次世界大戦後は神話的世界や権力者像の研究に戻ることはなかった¹²⁵⁾。ソーセージ職人で習志野収容所にいたビュッティングハウス (Büttinghaus) もこの墓地に眠っていた。彼のソーセージやハム造りの技は、現在神奈川県茅ヶ崎市と長崎県大村市で引き継がれている。

「自分の墓は甲南学園の見える所がよい」¹²⁶⁾、生前ユーパー先生はそう語っていたという。大学近くにあったその住まいの木造家屋20坪と宅地140坪1勾は、1965年9月、甲南学園が東洋紡績から900万円で買収した¹²⁷⁾。長らくテニスコートがあったが、一帯は最近マンションが建設された。

本論で述べてきたように、平生日記その他を辿ると、平生飢三郎とユーパーシャルは共通の時代を、その人脈も重なりながら、生きていたことがわかる。平生日記は自身の備忘としてではなく、後世の人々への備忘として読まれることを意識し、書かれたものだったと思う。そしてその仔細な記述にも、沈黙にも意味がある¹²⁸⁾。18巻という厚みのように重く、それでいて「空気ノヨウナ」¹²⁹⁾ 記憶遺産である。

注

- 1) 出口晶子 (文) / 出口正登 (写真) 2012 「五十嵐川・曲淵一サケと戊辰戦役碑 (水先案内・対岸へ⑤)」『やまかわうみ』4, アーツアンドクラフツ: 172-179
- 2) 松浦玲 2011 『勝海舟と西郷隆盛』岩波書店, pp. 154-157; 佐野静代 2018 「西郷菊次郎の来歴に関する再検討: 横浜・米国・台湾・京都」『人文学』(同志社大学人文学会) 202, p. 15
- 3) 森嶋外 1971 『森嶋外全集』7, 筑摩書房, p. 209
- 4) 上掲3) p. 208
- 5) 林啓介 1978 『板東俘虜収容所—第九交響曲のルーツ』南海ブックス; 林啓介・C. バーディック・U. メースナー 1982 『板東ドイツ人捕虜物語』海鳴社; 習志野市教育委員会 (編) 2001 『ドイツ兵士の見たニッポン—習志野俘虜収容所1915~1920』丸善; 習志野市教育委員会 (編) 2019 『ドイツ兵たちの習志野』; 大津留厚 2007 『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』山川出版社; 高橋輝和 2008 「丸亀・板東俘虜収容所の特殊俘虜」『文化共生学研究』(岡山大学大学院社会科学研究科) 6: 107-124; 高橋輝和 (編著) 2014 『丸亀ドイツ兵捕虜収容所物語』えにし書房; 瀬戸武彦 2006 『青島から

来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社; 今井宏昌 2012 「もうひとつの俘虜収容所—久留米とドイツ兵1914-1920」『福岡大学研究部論集』A (人文科学編), 11(5): 29-36; 大阪俘虜収容所研究会・大正ドイツ友好の会 (編) 2008 『大阪俘虜収容所の研究』大正区役所など

- 6) Worm, H. 1994 *Japanologie im Nationalsozialismus. Ein Zwischenbericht*, G. Krebs / B. Martin (Hrsg.) *Formierung und Fall der Achse Berlin-Tōkyō. Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung* 8, S. 153-186; Bieber, H. J. 2014 *SS und Samurai. Deutsch-japanische Kulturbeziehungen 1933-1945*, Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien, B. 55; Law, Ricky W. 2014 *Knowledge is Power: the Interwar German and Japanese Mass Media in the Making of the Axis*, *Bulletin of the German Historical Institute* 54: 27-47; Law, Ricky W. 2019 *Transnational Nazism: Ideology and Culture in German-Japanese Relations, 1919-1936*, Cambridge University Press など
- 7) 甲南大学文学会 (編) 1968 「故ユーパーシャル教授 遺影・略歴・著作目録」『甲南大学文学会論集 (ユーパーシャル教授追悼論文集)』37: 冒頭。またこれには日本国憲法の研究により1911年哲学博士の学位を受けるとある
- 8) ライプツィヒ大学教授カタログ (ユーパーシャル) 【2020年11月7日閲覧】
https://research.uni-leipzig.de/catalogus-professorum-lipsiensium/leipzig/Ueberschaar_359
- 9) 松尾展成 2004 「第一次大戦期の青島ドイツ兵捕虜に関するいくつかの問題」『岡山大学経済学会雑誌』36-1, p. 21
- 10) エーリヒ・ケストナー (著) / 高橋健二 (訳) 1962 『わたしが子どもだったころ』岩波書店, pp. 14-15
- 11) 岩本哲 2006 「ユーパーシャル先生の思い出, ベルリンの壁」【2020年11月25日閲覧】
http://grosslehrer.web.fc2.com/06.5.22_ueberschar.htm
- 12) 上原専祿 1942 「カール・ランプレヒトの生涯とその業績」『東京商科大学研究年報・経済学研究』7: 311-387; ルイーゼ・ショルン=シュッテ (著) / 佐々木博光 (訳) 2018~2020 「カール・ランプレヒト—産官学連携のなかの文化史— (その1~3)」『人文学論集 (大阪府立大学)』36: 133-171, 37: 47-95, 38: 289-325; 森宜人 (監訳) / 東風谷太一・志田達彦 (訳) 2015 「カール・ランプレヒト『中世におけるドイツの経済生活—「結語」—』」『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』70: 1-47 など
- 13) 高梨光司 1940 『佐多愛彦先生伝』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会, p. 240
- 14) 上掲13) pp. 240-241
- 15) 前掲13) p. 241
- 16) 上村直己 2008 『近代日本のドイツ語学者』鳥影社, pp. 111-154

- 17) 前掲13) pp. 531-533
- 18) 前掲12) 上原 p. 378
- 19) 瀬戸武彦 2006b 「青島ドイツ軍俘虜概要—その事績・足跡」 http://koki.0.007.jp/Kriegsgefangene_seto.htm 【2020年5月18日閲覧】；前掲5) 瀬戸, p. 139
- 20) 上掲19) 瀬戸 web ページ
- 21) 『ドイツ兵士の見たニッポン』 [前掲注5) p. 18] によると、砲艦ヤークアルの乗組員125名とクロー中佐率いる東アジア海軍分遣隊120名が含まれていた
- 22) シルレル (作) / 新関良三 (訳) 1922 『ワレンシュタイン』 東京堂書店
- 23) クリスティアン・ボアマン 2012 「パウル・クロー中佐—海軍東アジア分遣隊隊長にして日本軍の俘虜」 『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』 10, p. 15
- 24) ユルゲン・クリューガー (編) / ディルク・ファン＝デア＝ラーン (訳) 2003 「カール・クリューガーの回想録から」 『習志野市史研究』 3, p. 64
- 25) エーリッヒ・カウル (著) / 小阪清行 (訳) 2001 『青島の海軍兵士, 日本での捕虜1914年から1920年』 (私家版翻訳) http://koki.0.007.jp/06.8.31_Kaul_ja.htm 【2020年5月14日閲覧】
- 26) 前掲5) 習志野市教育委員会 2001, p. 159
- 27) 前掲19) 瀬戸 web ページ, 前掲5) 高橋
- 28) 林啓介 1978 『ユダヤ人の墓』 創世記；安宅温 1997 『父の過去を旅して—板東ドイツ俘虜収容所物語』 ポプラ社
- 29) Rumpf, F. 1938 *Japanische Volksmärchen*, Jena: Eugen Diederichs Verlag
- 30) 広瀬毅彦 1987 「ドイツにおけるクラインガルテンの成立とその社会政策的役割の変遷 (ライプチヒを例にして)」 『農林統計調査』 37-6, p. 39; 荏開津典生・津端修一 (編著) 1987 『市民農園—クラインガルテンの提唱』 家の光協会；穂鷹知美 2005 「世紀転換期ドイツの都市とガルテン：近代都市における身近な自然環境の変容」 『学習院史学』 43: 43-60 など
- 31) 広瀬毅彦 1990 『夢みる東ドイツ—市民生活からの報告』 実業之日本社, p. 134
- 32) カール・ハム (編) / 生熊文 (訳) 2003 「ハインリヒ・ハムの日記から」 『習志野市史研究』 3, pp. 42-44
- 33) 日本庭園協会 1934 『庭園と風景 特集クラインガルテン』 16-1
- 34) 前掲5) 習志野市教育委員会 2001, p. 89
- 35) 前掲5) 習志野市教育委員会 2001, pp. 91-92
- 36) 前掲5) 習志野市教育委員会 2001, p. 96
- 37) 前掲1)
- 38) 前掲23) p. 11
- 39) 前掲23) p. 20
- 40) 甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会 (編) 2011 『平生鈺三郎日記』 3巻, 甲南学園, p. 220
- 41) 前掲32) p. 51
- 42) 中田整一 2015 『ドクター・ハッカー—日本の運命を二度にぎった男』 平凡社, p. 60
- 43) 前掲19) 瀬戸 web ページ。なお、ボアマンはベルリンの資料にもとづき、クロー中佐のほか約4662名のドイツ兵及びオーストリア=ハンガリー兵が青島の戦いで日本軍・英国軍に降伏したとする [前掲23) p. 3]
- 44) 前掲5) 瀬戸, p. 149
- 45) 前掲24) p. 105
- 46) 甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会 (編) 2010 『平生鈺三郎日記』 1巻, 甲南学園, pp. 192-193
- 47) 上掲46) p. 197
- 48) 河合哲雄 1952 『平生鈺三郎』 拾芳会, pp. 897-898
- 49) 星昌幸 2004 「少しマクロな視点から・・・」 『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』 研究』 2, p. 50
- 50) 上掲49)
- 51) 前掲23) p. 9
- 52) 甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会 (編) 2010 『平生鈺三郎日記』 2巻, 甲南学園, p. 416
- 53) 前掲40) p. 208
- 54) 前掲13) p. 459
- 55) 前掲13) p. 584
- 56) 甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会 (編) 2012 『平生鈺三郎日記』 5巻, 甲南学園, pp. 175-176
- 57) 上掲56) pp. 261-262
- 58) 甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会 (編) 2013 『平生鈺三郎日記』 7巻, 甲南学園, p. 235
- 59) 甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会 (編) 2012 『平生鈺三郎日記』 6巻, 甲南学園, p. 98
- 60) 前掲52) pp. 345-346
- 61) 前掲48) p. 597
- 62) 前掲59) p. 212
- 63) 向軍治 1926 『国を亡ぼす教育：羅馬字』 三土社, pp. 130-131
- 64) H. シュリーマン (著) / 石井和子 (訳) 1998 『シュリーマン旅行記清国・日本』 講談社；シュリーマン (著) / 村田数之亮 (訳) 1954 『古代への情熱 (シュリーマン自伝)』 岩波書店, p. 25
- 65) 医事公論記事 1923 「日独学芸雑誌発行の計画」 『医事公論』 570, p. 32
- 66) 前掲13) p. 590
- 67) 江頭智宏 2016 「第一次世界大戦後における佐多愛彦のドイツとの学術交流—『日独学芸』に焦点を当てて—」 『教育史研究室年報』 名古屋大学教育学部教育史研究室, 21: 41-62
- 68) 前掲13) p. 590, pp. 596-597
- 69) ユーバーシャルのスダ行きは、俘虜解放後の1920年代前半頃と推定される
- 70) 笠岡政治 2005 「森丑之助と佐藤春夫」 楊南郡 (著) / 笠岡政治・宮岡真央子・宮崎聖子 (編訳) 『幻の人類学者・森丑之助—台湾原住民の研究に捧げた生涯』 風響社, pp. 252-253
- 71) 下村宏 1917 「ツーリストビューローより見たる台湾の地位」 『ツーリスト』 5-3, pp. 23-24
- 72) 湊照宏 2005 「植民地期および戦後復興期台湾における化学肥料需給の構造と展開」 『20世紀の中国化学工業—永利化学・天原電化とその時代』 東京大学社会科学研究所, p. 99

- 73) 丙牛生 (森丑之助) 1924「生蕃行脚」(所収前掲70), pp. 171-228)
- 74) 臨時台湾旧慣調査会 (編) 1915『台湾蕃族図譜』1巻
- 75) Florenz, K. 1898/99 Formosanische Volkslieder, nach Chinesischen Quellen, *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*. 7-1(I), S. 110-158
- 76) 伊能嘉矩 1897「(台湾通信 第17回) 北部地方に在る生蕃の Head-hunting (首狩り)」『東京人類学会雑誌』135: 333-344
- 77) 1896年から版を重ね, 世界の作業歌を集めてリズムと歌が労働に与える作用を分析した経済史の論。カール・ビュヒャー (著) / 高山洋吉 (訳) 1934『労働とリズム』第一出版
- 78) オットー・ヴィートフェルト (著) / 金子えりか・山田仁史 (訳) 2003a「台湾アタヤル族の経済, 法および社会に関する基本的諸事実と根本的諸形態」『台湾原住民研究』7, 風響社: 3-47; オットー・ヴィートフェルト (著) / 金子えりか・山田仁史 (訳) 2003b「アタヤル文化の停滞の諸原因を探る」『台湾原住民研究』7, 風響社: 48-74; 同論文に続く両訳者による「解説」は (山田): 75-84; (金子): 85-88
- 79) 大木毅 1995「フリードリヒ・ハックと日本海軍」『国際政治』109: 22-37
- 80) 前掲74) 1巻, 2巻
- 81) 北里蘭 1930『日本語の根本的研究』紫苑会, 台湾の部 p. 39
- 82) 上掲81) 台湾の部 p. 36
- 83) 北里蘭 1926『日本古代語音組織考 (解説・表図)』啓光社出版部
- 84) 泉健 2009「北里蘭「日本の演劇」ベルリン, 1901」『和歌山大学教育学部紀要 (人文科学)』59, p. 22
- 85) 葉高華 2017「從山地到山脚: 排灣族與魯凱族の社會網絡與集體遷村」『臺灣史研究』24-1, p. 162
- 86) 森丑之助 1917『台湾蕃族志』第1巻, 臨時台湾旧慣調査会
- 87) 前掲81) 台湾の部 pp. 26-27
- 88) 前掲81) 台湾の部 pp. 64-65
- 89) 前掲81) 台湾の部 pp. 42-44, pp. 67-70
- 90) 出口晶子 1993「台湾ヤミ族のタタラとエスニックアイデンティティー民族文化の継承におけるモノの力」『海と人間』21: 88-108
- 91) 前掲81) 台湾の部 p. 71
- 92) 岡正雄 1979『異人その他—日本民族=文化の源流と日本国家の形成』言叢社
- 93) 甲南学園平生鈞三郎日記編集委員会 (編) 2013『平生鈞三郎日記』8巻, 甲南学園, pp. 252-275
- 94) 大阪商船株式会社 1919『航路案内』(所収荒山正彦 (監修) 2015『シリーズ明治・大正の旅行』I-20, ゆまに書房), p. 27
- 95) 前掲93) pp. 268-269
- 96) 前掲48) p. 385
- 97) 前掲93) pp. 417-418
- 98) 日本ゲーテ協会 (編) 1932『ゲーテ年鑑』第1巻, p. 8; 上村直己 2019「ドイツ文学者 雪山俊夫の生涯と業績」『熊本学園大学論集・総合科学』24-2, p. 43
- 99) 兒玉州平 2014「戦間期硫安業界における東洋窒素工業株式会社の活動」『社会経済史学』80(3): 61-83
- 100) 内科のベルツとともに東京帝国大学医学部の基礎を築いたJ. スクリバと日本人の母親のもと東京で生まれ, 大戦中はドイツ軍兵士として従軍し, 俘虜となった。前掲19), 1914年12月2日 東京朝日新聞
- 101) 国際文化振興会 (編) 1939『日独文化協定』, p. 25
- 102) 前掲13) p. 588
- 103) 前掲7), ドイツ側資料は前掲8)
- 104) 黒崎勇 2002「定年・停年・諦念」『言語と文化 (甲南大学国際言語文化センター紀要)』6, p. 12; 岩本哲 2008「ヨハネス・ユーバーシャール博士 (明治18年〜昭和40年) —大阪・神戸でドイツ語教育」『Die Brücke』1月号 日独協会, p. 5; 井上純一 2009「三人のポーネル兄弟の日本—牧師館の子 Hermann Bohner (2)」『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』7, p. 70; 前掲6) Worm, S. 174-175; Law 2014, p. 37; Law 2019, pp. 288-294 など
- 105) 岩本哲 1995『学童疎開体験—国民学校五年生の兄と四年生の妹の体験と記録』大空社; 上掲104) 岩本 p. 5
- 106) 前掲42) p. 194
- 107) 前掲59) p. 309
- 108) 甲南学園50年史出版委員会 (編) 1970『甲南学園50年史図録』; 甲南学園, p. 48, pp. 97-133; 甲南学園50年史出版委員会 (編) 1969『甲南学園の50年』甲南学園, p. 72
- 109) 前掲59) p. 212
- 110) 甲南学園50年史出版委員会 (編) 1971『甲南学園50年史』甲南学園, pp. 125-128; 前掲56) p. 236
- 111) 前掲58) p. 397
- 112) 関口安義 2004『悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六』イー・ディー・アイ, p. 109
- 113) 前掲110) の平生日記や上掲112) の甲南高校卒業生の回想録に登場する, 1931年3月まで雇用されていたはずの藤岡蔵六の名が前掲108) の『甲南学園50年史図録』(1970) に抜けているのは記載漏れであろう
- 114) 前掲11)
- 115) 前掲104) 黒崎, p. 12
- 116) 村尾喜夫 1968「ユーバーシャール先生の思い出」『甲南大学文学会論集』37: (巻頭)
- 117) 上掲116)
- 118) 前掲5) 習志野市教育委員会 (編) 2001, p. 214
- 119) 『コスモポリス』は1934年カール・ハルトル監督, 『白鳥の舞』は1935年パウル・マルティン監督で共に日本公開。クラウス・クライマイアー (著) / 平田達治ほか (訳) 2005『ウーファ物語—ある映画コンツェルンの歴史』鳥影社・ロゴス企画部, p. 510, p. 512
- 120) 前掲13) p. 675
- 121) 谷口利一 1986『使徒たちよ眠れ—神戸外国人墓地物語』神戸新聞出版センター, p. 16

- 122) ヨハネ伝福音書の冒頭（『旧新約聖書』1937, 日本聖書協会, p. 138)
- 123) その息子, ドイツ東洋文化研究協会 (OAG) のディルク・ファン＝デア＝ラーンとユーバーシャルは生前親交があったという。前掲5) 習志野市教育委員会 2001, p. 207
- 124) シンチンガーは, 大阪高等学校在職中の1925年前後, 旧制甲南高校で2年半ほど講師を務めたことがあるらしく, 前掲108) 1970, p. 102 にその名があがる。Schinzinger, R. 1981 *Aus meiner OAG Mappe – Weihnachtsansprachen in Tokyo-*, Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens-OAG-, S. 26; 前掲104) 井上, p. 69
- 125) 井上純一 2012 「ヘルマン・ボーネルと戦争の時代 – 牧師館の子 Hermann Bohner (5)」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』10, p. 126, なお, 井上が本論の注43) p. 124 で「まだ確認できていない」と記しているボーネルが「抜けまいり」の紹介に用いた早稲田大学の Nishimura Masatsugu の論文「群集心理 – 御蔭参り」(1927) は, 日本文化史や古代船舶史の研究者・西村真次 1927『民俗断篇』磯部甲陽堂, pp. 65–90 の章のことであろう
- 126) 上掲125) 井上, p. 126
- 127) 前掲110) 甲南学園50年史出版委員会 (編) p. 117
- 128) 出口晶子 2016 「平生夙三郎の「常ニ備ヘヨ」一日記の沈黙と水害記念帳」『甲南大学総合研究所叢書』127: 99–124
- 129) 伊藤忠兵衛 甲南学園創立50周年「ヨキコト ハサカエル」<https://www.konan-u.ac.jp/100th/greeting/index.html> 【2020年12月2日閲覧】